

## 1. 哺乳類

### (1) 静岡県における生息種及び分布の特性

静岡県内における陸生の哺乳類は、8目20科60種である。内訳は、トガリネズミ形目2科9種、ハリネズミ形目1科1種、翼手目3科18種、霊長目1科1種、齧歯目4科16種、兎目1科1種、食肉目5科11種、偶蹄目3種である。この中には外来種9種が含まれる。

60種という種数は、本州に生息する哺乳類の殆どであり、静岡県の生態系が豊かであることを示している。特にコウモリ類が18種と多く確認されており、南アルプス地域や富士山地域の樹林帯、溶岩洞窟、伊豆地域の採石跡洞窟などが重要な生息場所となっている。またこの県内生息種の中では、オコジョとアズミトガリネズミは国内の生息地の南限となっている。外来種、特にアライグマやクリハラリス、ヌートリアの分布拡大が在来種に与える影響が懸念される。

### (2) 調査の概要

基本的には現地調査を実施した。ただし、調査費や調査体制の制約上、いわゆる普通種などの全県的な調査ができず、RDBとしては、その点、十分な調査はできなかった。そのため、当初はレッドリスト種の多いコウモリ類を主体とし、洞窟などの生息及び森林性コウモリの捕獲調査に重点を置いたほか、小型哺乳類の食虫類、齧歯類の捕獲調査及びセンサーカメラによる写真撮影、痕跡調査も併せて実施し、地域に生息する動物の確認に務めた。絶滅種については、文献の再調査を実施した。

### (3) レッドリスト種の選定経緯

前回(2004年)の県内哺乳類目録掲載種に加え、今回新たに生息確認された8種を含め、県内確認哺乳類60種の中から、外来種9種を除外して、調査結果や状況を加味して、明らかに生息が減少していないと思われる哺乳類を除き、32種をレッドリストの対象として検討した。前回(2004年)のレッドリスト種については、その後の状況を検討し一部ランクの修正を実施した。ただし、コウモリ類を除き、調査や情報が不十分な種(オコジョ、モモンガ、ヤマネ、ムササビなど9種)については、次回のRDB調査まで、現状のランクを継続することとした。

新規レッドリスト種は6種であるが、新たに確認されたコウモリ類4種(クビワコウモリ、ノレンコウモリ、モリアブラコウモリ、オヒキコウモリ)については、その希少性等を考慮し、ランクを決定した。

### (4) レッドリストの改訂で明らかになったこと

レッドリスト種は、前回(2004年)では25種で、今回は31種であり、6種増加した。また、絶滅のおそれのある種の総数は、前回(2004年)では2種であったが、今回は3種(絶滅危惧Ⅱ類(VU)3種)である。新たに、絶滅危惧Ⅱ類として、クビワコウモリ、チチブコウモリ、ノレンコウモリがランクされ、前回Ⅱ類のモモジロコウモリ、ユビナガコウモリは生息地や生息数の増加が認められ、準絶滅危惧にランクを下げた。コウモリ類は、絶滅危惧Ⅱ類3種、準絶滅危惧4種、情報不足8種、地域個体群1種、要注目種1種と、県内確認18種の内、アブラコウモリを除くすべての種がレッドリストにランクされている。この理由としては、生息確認の困難さから、調査が十分なされないことや、調査の難しさなどが理由としてあげられる。さらに捕獲しないと確認できない種(アズミトガリネズミ、カワネズミ、ハタネズミなど)も今後の調査継続の必要性がある。

### (5) 減少の主要因と脅威

絶滅危惧種の多くを占める翼手目の種については、洞窟性のコウモリでは、洞窟の閉鎖や崩落、森林性のコウモリについては、開発などによる生息地の改変などが主要因となりうる。コ

ウモリ類については、その確認が難しく、知らないうちに絶滅する可能性も排除できない。

カワネズミに関しては、河川の改変や汚染が主要因となる。カヤネズミについては、生息する湿地帯の減少が、ムササビについては、寺社林の減少など、ヤマネ、モモンガについては生息地の自然林の開発破壊などが主要因となる。ただ、これらの樹洞利用種については、近年人工林のスギ、ヒノキ林の利用も報告されており、今後の調査継続が望まれる。ニホンリスについては、外来種のクリハラリスの分布拡大による競合も危惧される。

## (6) 注目される種のカテゴリーと変更理由

今回絶滅危惧Ⅱ類に挙げたコウモリ類3種は、殆どが新たに県内で発見されたコウモリである。

チチブコウモリは、静岡県内では2006年に浜松市天竜区において約120年ぶりに再発見され、その後も毎年数頭は県中西部で確認されているが、非常に希少なコウモリである。

クビワコウモリは、2009年に県内では初めて南アルプスの原生林で確認され、そこではその後毎年確認されており、妊娠個体もあり、この地域で繁殖していることが判明した。国内で集団繁殖が確認されている場所は、長野県乗鞍高原だけであり、この地域は貴重な繁殖地であり、今後の保護対策が望まれる。

ノレンコウモリは、県内では2007年に川根本町の隧道で発見され、その後繁殖も確認され、頭数も増えてきている。調査の進展に伴い、南アルプスなどでも、少しずつ確認され始めているが、まだ、情報は少ない。

地域個体群にランクされたオヒキコウモリは、2009年伊東市の城ヶ崎海岸で発見された。ここでは、海岸の絶壁の岩の割れ目内に、アマツバメと共存しており生態が興味深い。

## (7) 考えられる保全対策、今後の留意点

減少の主要因と脅威に書かれた事項を、対策として考慮、検討すべきである。

哺乳類に関しては、現在、生態系加害獣として、シカやイノシシの駆除が進められているが、適正な生息頭数への確保が求められる。これらの獣の増加拡大は、生息地におけるレッドリスト種に限らず、すべての動物にまで、影響が及ぶ可能性がある。

特定外来生物のアライグマやクリハラリス、ヌートリアの分布拡大も深刻である。特にアライグマは、分布と生息数を増加拡大し続けており、在来種の生存にとって、大きな脅威である。官民一体となって、その対策、対応にあたるべきである。

また、今回の調査実施状況を鑑み、次回に向けて、県内の調査を継続していく必要性が求められる。このRDBの県民への周知、理解を広めることがその出発点になることを期待する。

## (8) 文献(多くの種で参考とした文献)

鳥居春己(1989) 静岡県の哺乳類—静岡県の自然環境シリーズ。第一法規出版、東京、231 pp.  
静岡県自然環境調査委員会 哺乳類部会 三宅隆編(2000) 静岡県の哺乳類【資料編】。静岡、149 pp.

Ohdachi Satoshi D., Ishibashi Yasuyuki, Iwasa Masahiro A. & Fukui Dai (2015)

The Wild Mammals of Japan Second Edition. 506 pp., Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.

コウモリの会(2011) コウモリ識別ハンドブック改訂版。文一総合出版、東京、88 pp.

(三宅 隆)

## 1. 種の解説

頭胴長 95～114 cm、尾長 30 cm 位。オオカミでは最も小形の亜種で、とくに四肢と耳が短く、前腕下部前面に暗色の斑紋があるなどが特徴。国内では、1905年1月に奈良県鷲家口で捕獲されたオスの個体を最後に、その後の記録はない。

## 2. 分布

本州、四国、九州の山地に生息していたと考えられる。県内では、江戸諸国産物帳に駿河国駿東郡御厨領に「山之犬」、伊豆国に「狼、山いぬ」、遠江国懸河領に「狼、山いぬ」の記載があり、広く生息していたと思われる。頭骨や毛皮などの標本も県内各地に存在する。また、旧中川根町の地名「山犬の段」や、旧水窪町の穂積神社では狼を奉ってあるなどの関わりも多い。

## 3. 生息環境

具体的な記載資料は特になし。

## 4. 生息状況

山地に群れをなして、シカやイノシシを捕食していたと思われる。富士山麓には多く生息していたようで、オオカミに関する昔話も多く残っている。特に半野生馬を管理する愛鷹山麓の愛鷹牧では、オオカミによる被害対策が重要な施策となっていたようである。聞き取り情報では、伊豆地域の西天城山系には、明治初頭までオオカミが生息していたことが示されている。

## 5. 絶滅の主要因と脅威

決定的な要因は不明であるが、開拓の進行による狩猟圧や捕食動物の減少、狂犬病対策のための捕殺、ジステンパーの流行などが複合的に作用した結果と考えられる。静岡県内における絶滅過程に関する資料はほとんどなく、詳細は不明である (99)。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

静岡県内におけるオオカミの資料、標本のうち、裾野市立富士山資料館に展示してあるオオカミの頭骨は、1859 (文政 11) 年に富士市勢子辻で獲られたものとされている。また、1533 (天文 2) 年に富士山南麓の十里木で捕獲されたオオカミのメスの頭骨が神奈川県個人宅に保存されているという。さらに現在の状況は不明であるが、徳川時代に遠江で捕獲された個人蔵 (名倉當太郎氏) のオオカミの頭骨もあることが報告されているほか、静岡市葵区の旧家には麻機村で捕獲されたオオカミの頭骨とその皮が保管され、裾野村産の頭骨は 1737 (元文 2) 年に捕獲されたとの記録がある。

そのほか、伊豆雲見には文久 (1861～1864) 生まれの人が獲ったオオカミの尾が伝えられているという。

## 8. 主な文献

- 中村一恵 (2004) ニホンオオカミの頭骨記録. 神奈川県立博物館研究報告 自然科学, (33): 91-96  
 野本寛一 (1979) 大井川 その風土と文化. 静岡新聞社, 静岡, 218 pp.  
 大村和男 (1987) 山犬伝承とその民俗文化. 静岡の文化, 11: 34-37  
 安田 健 (1987) 江戸諸国産物帳. 晶文社, 東京, 139 pp.

## 9. 標本

富士市勢子辻産 頭骨標本: 裾野市立富士山資料館



©2019 Susono City.  
富士市勢子辻産 1859年 裾野市立富士山資料館所蔵



## ニホンカワウソ *Lutra lutra nippon* (Imaizumi & Yoshiyuki, 1989)

イタチ科 Mustelidae

静岡県カテゴリー 絶滅 (EX) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅 (EX) : 環境省カテゴリー 絶滅 (EX) ]

### 1. 種の解説

全長約 1 m、体重 4~11 kg ほどで、オスはメスより大きい。ユーラシアカワウソの日本本土亜種。背は黒褐色、腹部は白っぽく、頭は扁平で、四肢には水かきがあり、尾は太く円錐形をしている。水生生活に適し、魚、甲殻類などを食べる。1979年の高知県での目撃例以降の記録がなく、2014年環境省が絶滅宣言した。その後 2017年対馬で自動カメラによりカワウソの生息が確認されたが、DNA 鑑定により、ニホンカワウソではなく、韓国からの大陸系亜種の個体であろうとの推測がなされた。

### 2. 分布

日本固有亜種で、本州、四国、九州のほか壱岐、対馬にも生息していたと考えられる。県内では江戸諸国産物帳に伊豆国に「獺」、遠江国懸河領に「かわうそ」の記載があり生息していた模様である。また、農林省の狩猟統計表では 1923年に静岡県で 4頭の捕獲の記録がある。

### 3. 生息環境

河川の中下流域、海岸域に生息していたとされている。

### 4. 生息状況

県内でも昭和初期までは天竜川、大井川、狩野川などの大きな河川の中下流域から沿岸部に広く生息していたと考えられるが、1928年に捕獲禁止となつてからの県内の記録がなく詳細は不明である。

### 5. 絶滅の主要因と脅威

毛皮の需要のための乱獲や河川の環境変化によるものと考えられている。静岡県内における絶滅過程の資料はなく、絶滅に至る経緯は不明である (99)。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

静岡県農林技術研究所森林・林業研究センターにカワウソの毛皮が存在する。

県内のカワウソに関する伝聞や文献は確認できておらず、生息状況などは不明である。

### 8. 主な文献

安田 健 (1987) 江戸諸国産物帳. 晶文社, 東京, 139 pp.

### 9. 標本

福島県須賀川産 仮剥製: 静岡県農林技術研究所 森林・林業研究センター

静岡県産標本の存在は不明。



©2019 Shizuoka Res.Inst.of Agric.andFor.

福島県須賀川産 1935年

静岡県農林技術研究所 森林・林業研究センター所蔵



分布位置に関する資料なし

(三宅 隆)

# クビワコウモリ *Eptesicus japonensis* Imaizumi, 1953

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①)変更コード4

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) ]

## 1. 種の解説

前腕長 38～43 mm、頭胴長 54～68 mm、尾長 35～43 mm、体重 8～13 g。体毛は背面が黒褐色で腹面は明黄褐色。頸部にかすかな淡色の横帯があるのでこの和名がある。日中のねぐらとして家屋を利用する事例が多い。日没後に開放空間を飛行して採餌する。長野県の乗鞍高原の家屋では最大 300 個体の出産哺育集団が確認されている。冬季の観察例はない。再捕獲による生存記録は 13 年が知られている。

## 2. 分布

日本固有種で、本州の中部以北に分布し、福島県、栃木県、埼玉県、石川県、山梨県、長野県、富山県及び岐阜県で発見例があり、長野県の乗鞍高原は国内で唯一知られた出産哺育場所である。本県は主たる分布の南限に当たる。1975 年 7 月に富士山麓での捕獲記録があるが詳細は不明で、確実な記録は 2009 年 7 月に静岡市葵区田代の標高 2,000 m 付近での記録である。その後も同所において個体数は少ないものの毎年確認されている。



静岡市葵区田代 2015 年 8 月 15 日 三宅 隆

## 3. 生息環境

県内では針葉樹・広葉樹混交の原生林に生息すると考えられるが、記録が少なく詳細は不明である。南アルプスの山梨県側では標高 1,450 m 付近のカラマツ植林、長野県側では標高 450 m の 2 次林の溪畔林で確認されている。

## 4. 生息状況

南アルプスでは妊娠個体が確認され、長野県・山梨県側の南アルプスでも出産哺育に係る情報がえられていることから、県内の南アルプスで出産哺育が行われていると考えられる。2016 年 8 月には 2010 年 7 月に標識された授乳痕のあるメスが再捕獲されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

確認場所と確認個体数が少なく、減少の主要因は不明である(99)。本県は主たる分布の南限に当たることから、元来、生息個体数が少ない種であるかもしれない。しかし、局所的に分布している可能性があり、自然林の伐採や開発行為によるねぐらの減少(11)が脅威になると推察される。

## 6. 保護対策

長野県の乗鞍高原ではコウモリ専用の小屋が建設され、継続的なモニタリング調査が実施されている。県内でも生息状況把握のための継続調査を実施し、長野県同様のコウモリ小屋の整備が望まれる。

## 7. 特記事項

長野県では、長野県希少野生動植物保護条例で指定希少野生動植物に指定されている。

## 8. 主な文献

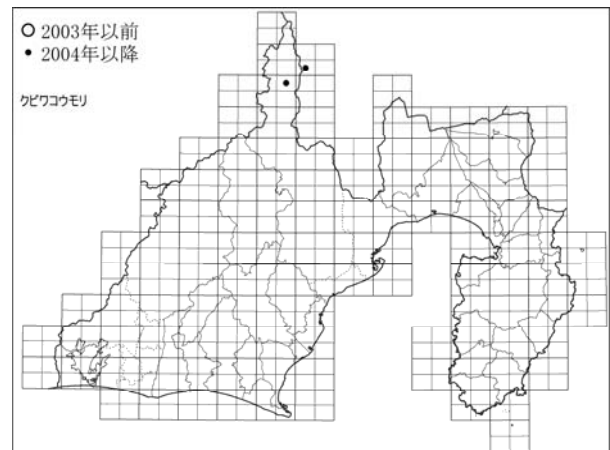
Kagei, N., I. Sawada & T. Kifune (1979) Helminth Fauna of Bats in Japan XX. *Annotationes Zoologicae Japonenses*, (52): 54-62

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己(2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

## 9. 標本

静岡市葵区田代産 剥製♂♀：ふじのくに地球環境史ミュージアム

(佐藤顕義・三宅 隆)



# チチブコウモリ *Barbastella darjelingensis* (Hodgson, 1855)

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-②)変更コード1

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種) :

環境省カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) 本州のチチブコウモリ]

## 1. 種の解説

前腕長 38～43 mm、頭胴長 47～62 mm、尾長 40～52 mm、体重 8～15 g。耳介は幅広く大きく、その基部は結合して耳珠は三角形。吻は幅広く両側に毛を密生した腺状の隆起がある。体毛は上下面とも黒褐色で霜降り状を呈する個体もいる。日中は洞窟、樹洞、建造物などをねぐらとする。夜間に樹冠付近を飛翔し昆虫類を採餌する。

## 2. 分布

国外では、イスラエルからコーカサス、インド北部、中国西部に分布し、国内では北海道、本州、四国で確認されているが、本州の記録はきわめて少ない。県内では1886年の旧豊田郡野部村(現在の磐田市下野部付近)での確認以降記録がなかったが、2006年に浜松市天竜区において120年ぶりに発見された。その後、毎年数頭が川根本町の隧道や廃隧道で越冬している。2016年には活動期の9月に静岡市葵区田代において確認された。

## 3. 生息環境

県内の活動期の主な生息環境は、ねぐらとなる樹洞を有する自然林と考えられるが詳細は不明である。岐阜県で8月に乳腺が発達したメスが捕獲されていることを考慮すると、県内の9月の捕獲場所は出産哺育場所に近い可能性が高いが、通過個体の可能性もある。

## 4. 生息状況

活動期の生息状況は確認例が少ないことから不明である。南アルプスの長野県側では、冬期に30個体程度が確認される地域があるが、県内では1～2個体と少ない。なお、2010年2月に標識したメス個体が2015年2月に同じ場所で再捕獲されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

減少の主要因は不明である(99)。冬眠場所として少数個体が利用する隧道は人の出入りが可能であることから、隧道の改修や人の立ち入りの影響が脅威となる。活動期の生息場所については、森林の伐採や植生の単一化によるねぐら環境の減少及び開発行為による餌昆虫類の減少が脅威と推察される(11)。

## 6. 保護対策

本県では越冬場所の隧道を保全することが第一である。また、今後は活動期の生息場所を把握するための調査や、既知冬期確認場所の継続的調査などを行い、個体群としての情報を収集する必要がある。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

久松問考・増田勇次郎(1891)蝙蝠通信. 動物学雑誌, 3: 507-508

佐藤顕義・勝田節子(2006)天竜川上流域で越冬したチチブコウモリとヒナコウモリ. コウモリ通信, 14(1): 5-9

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己(2012)静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

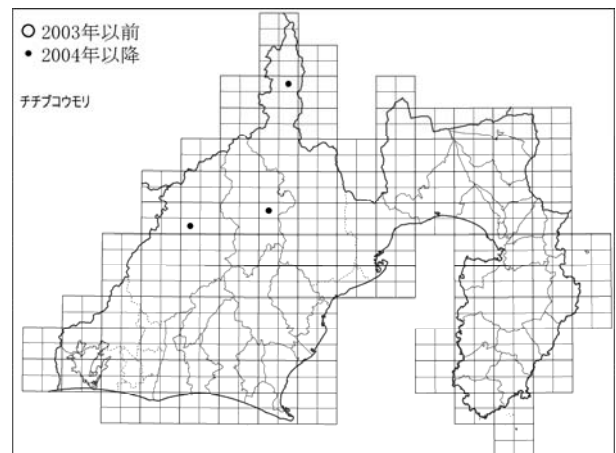
## 9. 標本

静岡市葵区田代産 剥製♂♀: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(佐藤顕義・三宅 隆)



川根本町 2010年1月31日 三宅 隆



### 1. 種の解説

前腕長 37～43 mm、頭胴長 44～55 mm、尾長 38～48 mm、体重 5～10 g。体毛は背面が明～灰褐色、腹面は白色。耳介は長く耳珠は 9 mm 以上。腿間膜後縁に細毛が列生していることが、その和名の由来となっている。日中のねぐらは主に洞穴を利用するが、家屋内や樹洞も利用する。主に林内や林縁で小型の飛翔昆虫や造網性のクモを食べる。再捕獲による生存記録は青森県で 16 年 2 カ月が知られている

### 2. 分布

国外では西ヨーロッパから東アジアに分布し、国内では北海道から鹿児島県にかけて局地的に知られる。県内では 2007 年に浜松市と川根本町の隧道で出産哺育集団が発見され、その後、静岡市葵区田代の標高 2,000 m 付近でも確認された。富士山では山梨県側で記録がある。

### 3. 生息環境

常緑広葉樹林帯の隧道で、活動期及び越冬期ともに確認されている。越冬期は単独でいることが多かった。活動期は常緑針葉樹林帯の高標高地でも確認された。

### 4. 生息状況

川根本町の隧道は 2007 年より出産哺育が確認され、年々集団を構成する個体数が増加している。越冬期は周辺の隧道で数個体ずつ確認されることがある。浜松市のお産哺育集団は 2010 年の大雨によるねぐら部分の崩壊により、隧道を利用しなくなった。

### 5. 減少の主要因と脅威

2010 年のねぐら崩壊 (55) により、2ヶ所あった出産哺育場所の一つが消失したことは、減少の主要因となることは明らかである。残った出産哺育場所も、隧道の改修や人や車両の通行による影響 (18) が直接的な脅威となる。さらに森林伐採や開発行為による餌昆虫類の減少 (11、23) も脅威である。

### 6. 保護対策

家屋でも出産哺育を行うことから、コウモリ専用の小屋の建設が有効となる可能性がある。早急の課題としては出産哺育が確認されている唯一の隧道を保全し、周辺の隧道などを含めた継続調査の実施、さらに他地域での生息確認調査を行い、情報を収集する必要がある。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

佐藤顕義・勝田節子・山本輝正 (2008) 大井川水系および天竜川水系で確認したノレンコウモリ *Myotis nattereri* の出産哺育と周年動態. コウモリ通信, 16(1): 2-9

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己 (2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

吉行瑞子 (1971) 富士山の翼手類. 黒田長久編, 富士山地域の動物相 (in 富士山総合学術調査報告書), pp. 829-833. 富士急行株式会社・財団法人堀内浩庵会, 富士吉田.

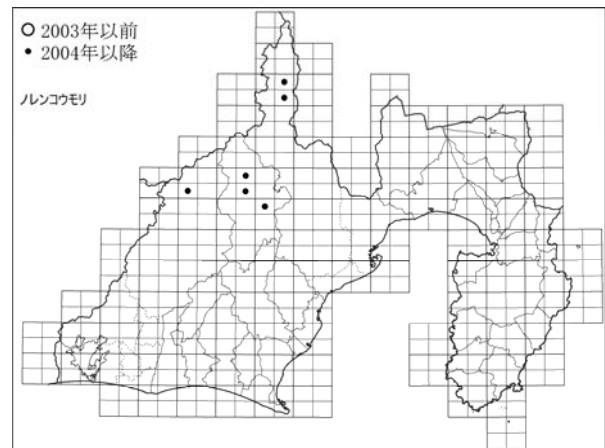
### 9. 標本

静岡市葵区田代産 剥製♂♀：ふじのくに地球環境史ミュージアム

(佐藤顕義・三宅 隆)



川根本町 2013年6月29日 三宅 隆



### 1. 種の解説

頭胴長 47~65 mm、尾長 46~52 mm、体重 2~5 g。  
本州に生息する小型のトガリネズミ類。形態及び遺伝子情報から本種は北海道及びユーラシア北部に分布するチビトガリネズミに近縁と考えられている。同所的に分布するシントウトガリネズミとは上顎単尖歯の大きさ、脳頭蓋骨の形状、頤孔と臼歯との位置関係、頭骨最大長から識別できる。

### 2. 分布

日本固有種で、本州に分布し、富山、石川、栃木、群馬、山梨、長野、岐阜、静岡県の高標高域に生息している。静岡県では南アルプス地域の池の沢小屋、茶臼岳手前、聖平小屋周辺、千枚小屋周辺、三伏小屋、本谷山、権衛門沢、熊ノ平小屋から確認されている。一方、伝付峠や山伏岳の調査では確認されていない。

### 3. 生息環境

県内ではダケカンバやオオシラビソなどが生育する森林林床の苔が繁茂する環境で確認されている。礫間や小さな坑道近くで捕獲されていることから、これらを利用しているものと考えられるが、詳細は不明である。

### 4. 生息状況

捕獲調査の結果から生息数はシントウトガリネズミより少ないと考えられるが、十分な調査が行われていないため不明である。

### 5. 減少の主要因と脅威

森林伐採(11)による生息環境の乾燥・攪乱、ニホンジカの摂食による下層植生の衰退・表土の不安定化(54)、高山域へのイノシシ進出・採餌に伴う表土攪乱(56-2)が、本種の減少の主要因として懸念される。

### 6. 保護対策

南アルプスの稜線部周辺は国立公園特別保護地区や特別地域に指定され、土地の改変や森林伐採が規制されている。国立公園外の高標高域では、森林の保全が必要である。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

阿部 永 (2000) 日本産哺乳類頭骨図説. 北海道大学図書刊行会, 札幌, 290 pp.

阿部 永・石井信夫・伊達徹魯・金子之史・前田喜四男・三浦慎悟・米田政明 (2005) 日本の哺乳類[改訂版]. 東海大学出版会, 秦野, 206 pp.

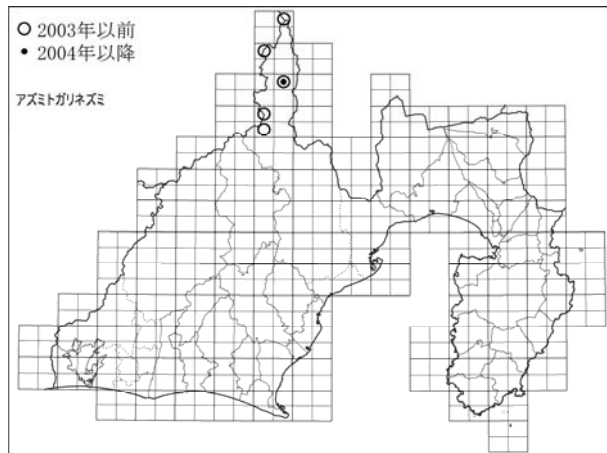
三宅 隆 (2005) アズミトガリネズミ. 静岡県自然環境調査委員会哺乳類部会 (編), 静岡県の哺乳類【資料編】, pp.13-14. 同会, 静岡.

Ohdachi S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa & D. Fukui (2015) The Wild Mammals of Japan Second Edition. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, 506 pp.

佐々木彰央・高田 歩 (2015) 静岡県南アルプスにおけるトガリネズミ属. 東海自然誌, (8): 27-34

### 9. 標本

静岡市葵区田代産 剥製：ふじのくに地球環境史ミュージアム



(佐々木彰央)



# カワネズミ *Chimarrogale platycephala* (Temminck, 1842)

トガリネズミ科 Soricidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

頭胴長 94~144 mm、尾長 87~113 mm、体重 24~56 g の大型のトガリネズミ。油分を多く含む黒褐色の柔らかかな毛で覆われ、水中では水をはじいて銀色に見える。また足の裏には剛毛が密生し水かき代わりとなり、水中を自由に泳ぐことが可能である。山間の溪流に住み、日中にも活動し、水中を泳ぎながら小魚、水生昆虫、ヒル、サワガニなどを捕食する。春と秋に2~4頭の子を産む。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、九州に分布する。低地から標高 2,000 m までの山間の溪流に生息する。県内では河津川、狩野川、興津川、安倍川、大井川、天竜川の各水系の上流部の溪流で生息が確認されている。2004 年以降の調査でも大井川水系東河内・千石沢・木賊沢・西俣・東俣、興津川水系黒川などで記録されている。

## 3. 生息環境

水の澄んだ山間の溪流に生息する。落葉広葉樹主体の溪畔林が分布する溪流での確認が多い。河川形態では、短い距離で瀬から淵へと滝のように流れ込む河道が連続する溪流 (Aa 型) で主に捕獲され、まれに平瀬が長い中流 (Bb 型) でも捕獲された。また、減少の主要因と考えられる砂防堰堤が存在していても、供用後長い時間が経過しているような場所では確認されている。

## 4. 生息状況

主に県内主要河川の上流で確認されているものの、生息密度は高くない。瀬と淵が連続し、滝のような急勾配で、流路幅が 1 m 程度の枝沢で、かつ通年を通して流水があり、溪畔林が分布している淵での捕獲が多い。

## 5. 減少の主要因と脅威

山間の溪流を生息地としているため、砂防堰堤 (25) や河川改修等 (13) の河川工事や河川の水質に影響を及ぼすような開発 (31) は本種の生息に影響を及ぼす。

## 6. 保護対策

現状の河川形態を保全しつつ施工材料には自然素材や多孔質材料を使用し、溪畔林の再生を想定した施工に努める。改変する河川の事前調査と個々の保護対策が必要と思われる。

## 7. 特記事項

通常捕獲調査はカゴ罠を使用するが、捕獲個体回収時には低体温などにより死亡していることが多い。そのため、カゴ罠とパイプで連結した保温材と餌を備えた退避室を用意することで、延命を図る方法が生み出されている。また、生息確認が目的の場合は、水際でのセンサーカメラ調査も有効と思われる。

## 8. 主な文献

阿部 永 (2003) カワネズミの捕獲、生息環境および活動. 哺乳類科学, 43(1): 51-65

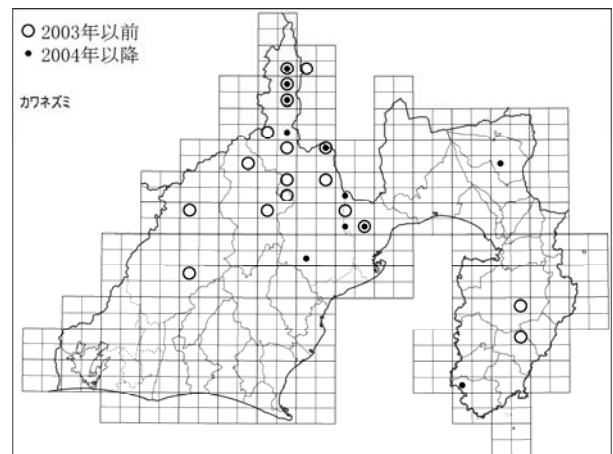
藤本竜輔・安藤元一・小川 博 (2011) カワネズミ *Chimarrogale platycephala* における効率的な捕獲調査方法の検討. 東京農業大学集報, 55(4): 290-296

## 9. 標本

静岡市葵区田代産: ふじのくに地球環境史ミュージアム



静岡市葵区田代 2000年5月7日 三宅 隆



(榊原英幸)

# キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum* (Schreber, 1774)

キクガシラコウモリ科 Rhinolophidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

頭胴長 53~82 mm、尾長 28~45 mm、前腕長 52~65 mm、体重 17~35 g。比較的大型の種で、顕著な鼻葉を持つ。体毛は淡い褐色である。洞窟などで休眠し、中・大型のガなどの昆虫類を餌とする。広短型の翼をもち、休眠時はその翼で体を覆っている。メスは秋に交尾し、初夏に一仔を産む。

## 2. 分布

国外ではヨーロッパ、アジア中南部などに、国内では北海道、本州、四国、九州、三宅島などに分布する。県内では下田市、松崎町、小山町、静岡市、川根本町、袋井市、浜松市などで確認されている。海岸付近から南アルプスの高標高域まで記録があり、洞窟を主なねぐらとするコウモリ類の中では最も確認場所が多い。

## 3. 生息環境

休眠場所としては、内部が狭く曲がりくねった洞窟や、内部が広い溶岩洞窟など様々な洞窟を利用する他、廃屋なども利用することがある。県内では石灰岩洞窟、石切場跡、廃坑、溶岩洞窟などに生息する。夜間は森林内などを飛行し、ガ類などの飛行性昆虫類などを捕食する。

## 4. 生息状況

川根本町で夏季や冬季に 300~500 頭が集まる大きなコロニーが見られる。松崎町、静岡市、袋井市、浜松市でも 100 頭を超えるコロニーが確認されるなど、場所や時期によっては数多く見られることがある。出産哺育場所は下田市、浜松市などで確認されている。2003 年以前の調査で個体数が比較的多かった場所では、近年も同程度の数が見られる。また、2004 年以降、出産保育場所や数の多い生息地を含む新たな生息地が見つかっている。

## 5. 減少の主要因と脅威

近年特に減少傾向は認められていないが、生息地には隧道、観光洞窟、資材置場としての利用形跡がある石切場跡などは人の利用があるため、利用 (18) が増加すると生息環境が悪化すると考えられる。また、危険防止対策に伴う廃隧道などの改修・封鎖や廃坑の埋没 (18) は、ねぐら消失などの脅威になる。

## 6. 保護対策

観光洞になっている生息洞窟では一部が立入禁止になっている場合がある。他県では、洞窟出入口へのバットゲート (人は入れないがコウモリ類は通過できる柵) の設置や、人工洞穴改修時のとまり場設置 (ねぐら消失の代償措置) などの保護対策が行われており、本県でも同様の対策が必要である。

## 7. 特記事項

富士宮市の一部の溶岩洞窟は、「人穴富士講遺跡」として世界遺産構成資産の一部に指定されている。過去に記録のある御殿場市の観光洞は、国指定天然記念物に指定されている。

## 8. 主な文献

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己 (2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

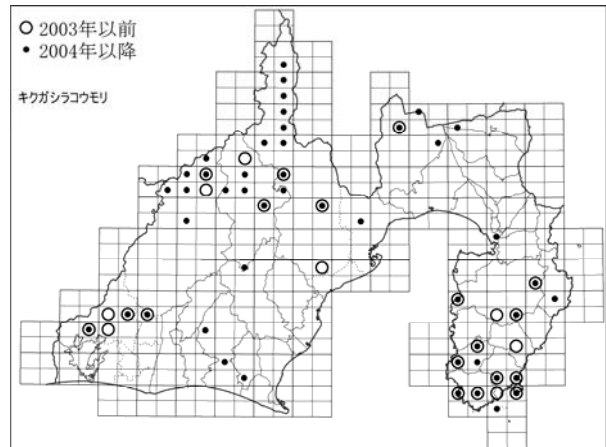
## 9. 標本

川根本町産 仮剥製、骨格標本: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(小長谷尚弘・三宅 隆)



川根本町 2013年7月6日 三宅 隆



# コキクガシラコウモリ *Rhinolophus cornutus* Temminck, 1834

キクガシラコウモリ科 Rhinolophidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

頭胴長 35～50 mm、尾長 16～26 mm、前腕長 36～44 mm、体重 4.5～9 g。小型の種で、小さな鼻葉を持つ。体毛は淡い褐色である。主に洞窟で休眠し、小・中型のガやガガンボなどを餌としている。また、特徴的な周波数帯の超音波を出すことが知られている。メスは秋に交尾し、初夏に1仔を産む。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州、四国、九州、三宅島、対馬、奄美大島などに分布する。県内では下田市、松崎町、伊豆市、沼津市、富士宮市、静岡市、川根本町、浜松市など11の市町で記録がある。海岸近くから南アルプスまでの比較的広い範囲に分布する。過去には御殿場市などでも記録がある。

## 3. 生息環境

休眠場所としては比較的高温多湿で、年中洞内の微気象が一定している洞窟が主に利用される。県内では溶岩洞窟、石灰岩洞窟、石切場跡、廃坑、廃隧道などで確認されている。

## 4. 生息状況

富士宮市の溶岩洞窟で夏季に2,000～3,000頭、伊東市や川根本町の廃隧道で夏季に500～2,000頭が確認されるなど、場所や時期によっては数多く見られることがある。出産哺育場所は伊豆市、富士宮市などで確認されている。2003年以前の調査で個体数が比較的多かった場所では、近年も同程度の数が見られる。

また、2004年以降、出産哺育場所や数の多い生息地を含む新たな生息地が見つかった。

## 5. 減少の主要因と脅威

近年特に減少傾向は認められていないが、生息地には隧道、観光洞窟、資材置場としての利用形跡がある石切場跡などの人の利用がある場所が含まれるため、利用(18)が増加すると生息環境が悪化すると考えられる。また、危険防止対策に伴う廃隧道などの改修・封鎖や廃坑の埋没(18)は、ねぐら消失などの脅威になる。

## 6. 保護対策

観光洞になっている生息洞窟では一部が立入禁止になっている場合がある。他県では、洞窟出入口へのバットゲート(人は入れないがコウモリ類は通過できる柵)設置や、人工洞穴改修時のとまり場設置(ねぐら消失の代償措置)などの保護対策が行われており、本県でも同様の対策が必要である。

## 7. 特記事項

富士宮市の一部の溶岩洞窟は、「人穴富士講遺跡」として世界遺産構成資産の一部に指定されている。過去に記録のある御殿場市の観光洞は、国指定天然記念物に指定されている。

## 8. 主な文献

佐藤頭義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己(2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

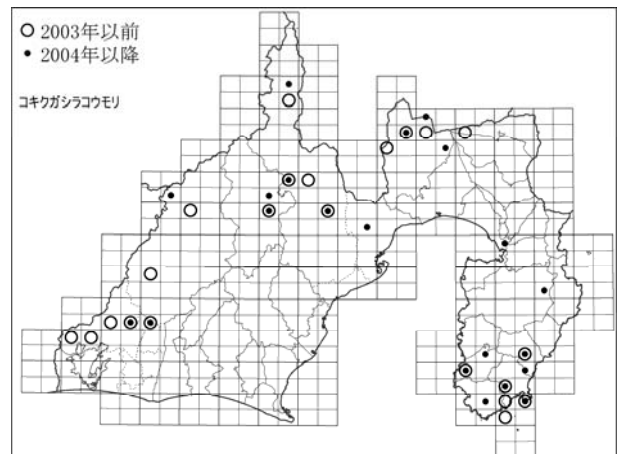
## 9. 標本

川根本町産 仮剥製: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(小長谷尚弘・三宅 隆)



川根本町 2014年8月9日 三宅 隆



# モモジロコウモリ *Myotis macrodactylus* (Temminck, 1840)

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 13

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

前腕長34~42 mm、頭胴長40~63 mm、尾長29~49 mm、体重6~11 g。体毛は灰~黒褐色で、後足が大きく下腿長の半分以上の長さがある。下腹部から大腿部にかけて本種の名前の由来となっている白い毛が生えている。日中のねぐらは主に洞窟であるが、河川敷などの石の下で発見された例もある。初夏に洞窟内で50~500頭の出産哺育集団を形成する。ガやカゲロウなどの飛翔昆虫を主要な餌とする。再捕獲による生存記録は山口県で18年10カ月が知られている。

## 2. 分布

国外ではシベリア東部、サハリンに、国内では北海道、本州、四国、九州、佐渡島、対馬に分布する。県内では南伊豆町、松崎町、河津町、富士宮市、静岡市、川根本町、菊川市、掛川市、浜松市の9市町で確認され、過去には伊東市、長泉町、磐田市でも記録がある。海岸近くから南アルプスの標高約1,400 mまで分布する。

## 3. 生息環境

石切場跡、廃坑、溶岩洞窟、石灰岩洞窟、隧道、用水路トンネルなどで休眠が確認され、河川沿いなどの森林内では飛翔個体が捕獲されている。多数の個体が確認されたのは廃隧道、石切場跡、溶岩洞窟で、いずれも比較的内部空間が広い場所であった。

## 4. 生息状況

松崎町の石切場跡、富士宮市の溶岩洞窟、川根本町の廃隧道では夏季に500~1,000頭程度が確認され、出産哺育場所にもなっている。これら以外では、越冬期などに1~50頭程度が確認されている。2004年以降、新たな生息地や出産哺育場所が確認されている。既知出産哺育場所の川根本町の廃隧道での生息状況は、2003年以前から大きな変化は見られない。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息洞窟の一部では観光地整備 (18) により個体数が減少している可能性がある。また、用水路トンネルや廃隧道、廃坑などの人工洞穴が生息地の場合には、改修や封鎖、埋没 (18) がねぐら消失などの脅威になる。

## 6. 保護対策

観光洞になっている生息洞窟では一部が立入禁止になっている場合がある。他県では、洞窟出入口へのバットゲート (人は入れないがコウモリ類は通過できる柵) 設置や、人工洞穴改修時のとまり場設置 (ねぐら消失の代償措置) などの保護対策が行われており、本県でも同様の対策が必要である。

## 7. 特記事項

富士宮市の一部の溶岩洞窟は、「人穴富士講遺跡」として世界遺産構成資産の一部に指定されている。

## 8. 主な文献

佐藤頭義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己 (2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

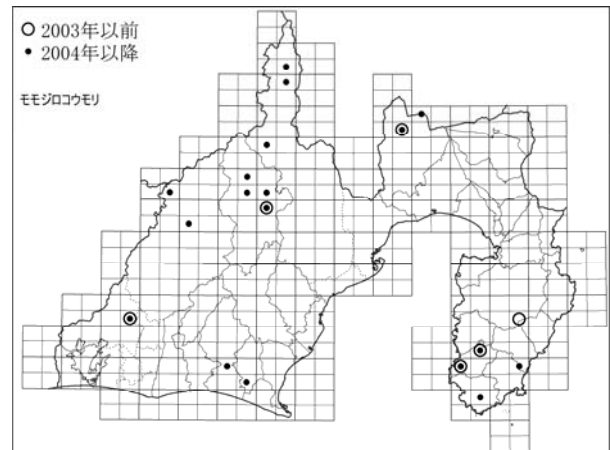
## 9. 標本

川根本町産 剥製♂♀ : ふじのくに地球環境史ミュージアム

(小長谷尚弘・佐藤頭義・三宅 隆)



川根本町 2015年12月15日 三宅 隆



# ユビナガコウモリ *Miniopterus fuliginosus* (Hodgson, 1835)

ユビナガコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更コード 13

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

前腕長45~51 mm、頭胴長59~69 mm、尾長51~57 mm、体重10~17 g。体色は黒~茶褐色で、第3指の第2指骨が非常に長く第1指骨の約3倍となる。洞窟をねぐらに利用し、時に数万頭の群れを作り、初夏に1仔を産む。小・中型のガを主な餌とする。長距離を飛翔することが可能で、これまで下田市から滋賀県まで340 kmを移動した事例がある。

## 2. 分布

国外ではインドや東アジア、国内では本州、四国、九州、佐渡島、屋久島などに、県内では主に伊豆地域に分布する。南伊豆町、下田市、沼津市などの8市町で確認されている。過去には御殿場市でも記録がある。

## 3. 生息環境

多数確認されているのは、主に洞内及び出入り口が広い石切場跡と廃隧道である。夜間は樹冠上空などの開けた場所を飛行し採餌する。

## 4. 生息状況

下田市の石切場跡では冬季に5,000頭程度、夏季に100頭程度が見られることがあり、当地または周辺に出産哺育場所が存在する可能性がある。その他、伊豆市の廃隧道や松崎町の廃坑などでも、冬季に300~500頭程度が確認されている。伊豆地域以外では袋井市の防空壕で1個体が確認されただけである。2003年以前に個体数が比較的多かった場所では近年も同程度の数が見られ、2004年以降は伊豆市や松崎町などで個体数の多い新たな生息地も見つかっている。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息洞窟の一部では観光地整備 (18) により個体数が減少した可能性がある。また、危険防止対策に伴う洞窟坑口封鎖や廃坑の埋没 (18) はねぐらの消失となる。資材置き場に利用されていた形跡のある洞窟では利用の再開 (18) が生息の脅威に、高空飛翔時には風力発電施設への衝突死 (26) が脅威となる。

## 6. 保護対策

観光洞になっている生息洞窟では一部が立入禁止になっている場合がある。他県では、洞窟出入口へのバットゲート (人は入れないがコウモリ類は通過できる柵) 設置などの保護対策が行われており、本県でも同様の対策が必要である。また、風力発電施設における衝突死の状況を把握する必要がある。

## 7. 特記事項

過去に記録のある御殿場市の観光洞は国指定天然記念物に、伊東市のねぐらは「大室山」として国指定天然記念物に指定された範囲内に存在している。

## 8. 主な文献

澤田 勇 (2005) バンディング法によって明らかにされたコウモリの飛翔行動について. 長崎県生物学会誌, 59: 1-7

下泉重吉・森 弘安 (1976) 伊豆半島におけるユビナガコウモリ (*Miniopterus schreibersii*) の生態学的研究(2)-帰洞性 (Homing) について-. 生物教育, 16: 9-11

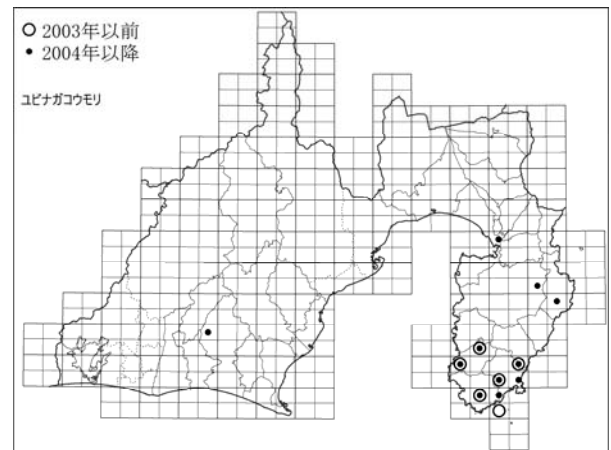
## 9. 標本

下田市産 剥製♂♀ : ふじのくに地球環境史ミュージアム

(小長谷尚弘・佐藤顕義・三宅 隆)



松崎町 2013年1月15日 三宅 隆



# カヤネズミ *Micromys minutus* (Pallas, 1771)

ネズミ科 Muridae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

頭胴長 50~80 mm、体重 7~14 g。日本の啮歯目中最小種で、尾は頭胴長よりも長い。毛色は背面が暗褐色で、腹面は白色である。低地の草地などに、ススキの葉などを用いて鳥の巣のような球形の巣を作る。春と秋の年2回の繁殖期を持つが、地域により夏にも繁殖する。1回の産子数は2~8頭である。

## 2. 分布

旧北区に広く分布し、日本では福島県以南の本州、四国、九州、隠岐諸島や対馬などに分布する。県内では、海岸部、天竜川、大井川及び狩野川周辺、富士山山麓、伊豆半島南部などで記録がある。河川沿いや農耕地周辺などの高茎草地に分布している可能性があるが、確認記録が少なく、詳細な分布は不明である。

## 3. 生息環境

低地の草地、水田、休耕田、沼沢地、荒地などイネ科植物が生育するところを好む。水場を好み、泳ぐともいわれるが、南アルプスでは標高 1,000 m の尾根のススキ草原でも確認されている。

## 4. 生息状況

湿地帯の開発や河川敷の公園化、グラウンド化などにより生息可能な草地が減少し、生息域ならびに生息数は減少していると考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

カヤ場などの開発、遷移の進行、樹林化による生息環境の減少 (16, 54) が脅威となる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

静岡県環境影響評価条例に基づく環境アセスメントの調査結果などの記録も活用することが望まれる。

## 8. 主な文献

鳥居春己 (1989) 静岡県の哺乳類. 第一法規出版, 東京, 231 pp.

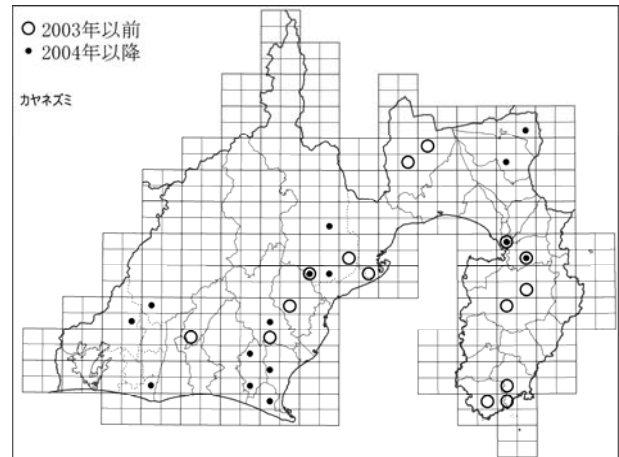
鳥居春己 (2005) カヤネズミ. 静岡県自然環境調査委員会 哺乳類部会編, 静岡県の哺乳類【資料編】, pp. 83-84. 同会, 静岡.

## 9. 標本

富士宮市産: ふじのくに地球環境史ミュージアム



©2019 M.Banno  
静岡市葵区麻機遊水地 2006年7月30日 伴野正志



(大場孝裕)

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

頭胴長 27~48 cm、尾長 28~41 cm、体重 700~1,300 g。夜行性で、樹上で活動する。前後肢の間にある皮膜を広げ、100 m 以上も滑空できる。巣は大木の樹洞などに作る。ほぼ完全な植物食で、木の葉、芽、花、果実、種子などを採食し、時にヒノキの樹皮も食べる。メス同士はなわばりを持つが、オス同士の行動圏は重なる。春と秋に1~4頭を出産する。

### 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州に分布する。県内では海岸部から富士山麓、南アルプス亜高山帯まで広く分布すると見られるが、確実な生息情報の記録は少ない。

### 3. 生息環境

低地の社寺林から亜高山帯の天然林まで生息する。樹洞に営巣するため、樹洞ができるような広葉樹大径木のある森林が生息環境である。本種が滑空して移動するには、高い幹から飛び立つために、大径木の存在が必要条件である。平地では、社寺林がそのような条件を満たしている。

### 4. 生息状況

県内に広く生息すると思われるが、情報が不足している。

### 5. 減少の主要因と脅威

社寺林などの大径木の伐採 (11)、周囲開発による生息域の孤立化 (23、24) が減少の主要因として考えられる。

### 6. 保護対策

1994年以降狩猟鳥獣から除外されている。皆伐の減少によりスギ人工林の高齢大径化が生じており、各所でキツキ類の営巣 (穿孔) が確認されているとともに、本種の営巣も確認されている。低地帯から山地帯の人工林でも、本種を含む2次樹洞営巣種の生息環境の増加が期待できる。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

鳥居春己 (1989) 静岡県の哺乳類. 第一法規出版, 東京, 231 pp.

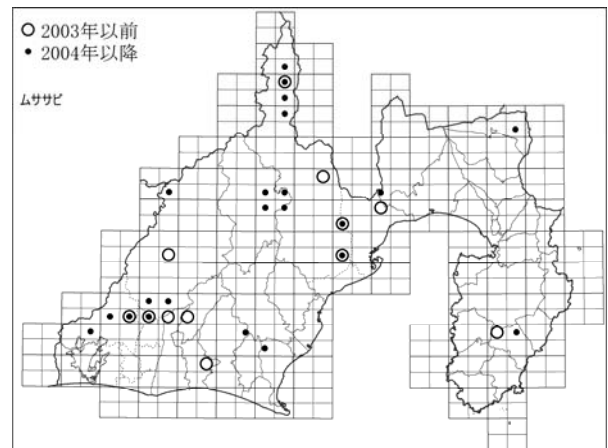
鳥居春己・大場孝裕 (2005) ムササビ. 静岡県自然環境調査委員会哺乳類部会 編, 静岡県の哺乳類【資料編】, pp. 74-75. 同会, 静岡.

### 9. 標本

静岡県産: ふじのくに地球環境史ミュージアム



©2019 T.Miyake  
牧之原市 2013年6月13日 三宅 隆



(大場孝裕)

### 1. 種の解説

頭胴長 77~107 mm、尾長 20~26 mm、体重 26~36 g。世界的にみても小型の真性モグラで、尾が長いのが特徴。前肢は大きく発達し、後肢は小さい。国内に生息する他のモグラ亜科よりも下顎歯数が1対多い。毛色は灰褐~黒色まで地域によって異なる。自然下では昆虫類やミミズ類、ジムカデ類、ヒル類などを食べている。

### 2. 分布

日本固有種で、青森県から広島県にかけての山地に局所的に分布する。県内では、富士山の須走、高鉢、南アルプスの千石沢、樫島、中俣、光岳、寸又川左岸林道で記録がある。

### 3. 生息環境

低山帯から高山帯までの森林に生息するが、生息数は多くないとされる。

### 4. 生息状況

県内では、2003年以前、2004年以降ともに数例の記録があるだけで、生息状況の詳細は不明である。国内の生息状況や県内の記録を考慮すると、山地帯から亜高山帯の落葉広葉樹林や針葉樹林などに低密度で生息していると推察される。

### 5. 減少の主要因と脅威

生息状況が十分分かっていないため減少の主要因などは不明であるが、森林伐採(11)や生息地周辺の大規模な改変(23)が脅威となりうる。

### 6. 保護対策

土壌動物を主な食物としていることから、落葉層の発達した落葉広葉樹林などの保全が必要と考えられる。

### 7. 特記事項

生きた状態での確認は高鉢で偶然道路上に出てきた個体を捕獲した1例のみで、他は死亡個体の拾得記録があるのみである。本種が以前まで属していた *Euroscaptor* とは骨格の形状などが異なることから、2016年に新たな属 *Oreoscaptor* に移動となった。

### 8. 主な文献

阿部 永 (2000) 日本産哺乳類頭骨図説. 北海道大学図書刊行会, 札幌, 290 pp.

阿部 永・石井信夫・伊達徹魯・金子之史・前田喜四男・三浦慎悟・米田政明 (2005) 日本の哺乳類改訂版. 東海大学出版会, 秦野, 206 pp.

Kawada, S. (2016) Morphological review of the Japanese mountain mole (Eulipotyphla, Talpidae) with the proposal of a new genus. *Mammal study*, 41: 191-205

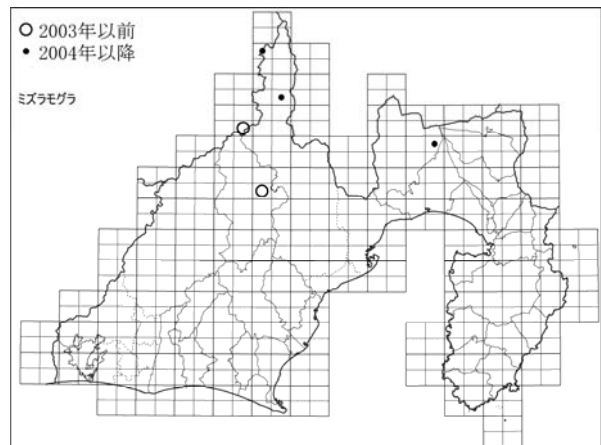
### 9. 標本

静岡市葵区産 : ふじのくに地球環境史ミュージアム (SPMN-MA-1301)

(佐々木彰央)



©2019 T.Miyake  
富士宮市高鉢 2004年7月4日 三宅 隆





### 1. 種の解説

前腕長 57~65 mm、頭胴長 79~108 mm、尾長 45~67 mm、体重 26~60 g。体毛は光沢のある褐色。日中のねぐらは主に樹洞を利用するが、近年、人工物でも確認されている。夜間上空を高速で飛びながら昆虫類を捕食するが、鳥類を捕食する場合もある。越冬期前後は日中も飛翔することがある。栃木県日光から埼玉県鴻巣市までの約 74 km を移動した事例がある。標識再捕獲による生存記録は 6 年以上が知られている。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島や台湾、中国、シベリア東部に分布し、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。沖縄県では偶然飛来したと考えられている 2 事例がある。県内では 1975 年 7 月 26 日の富士山麓で捕獲された詳細場所不明の記録及び 1987 年に旧清水市日本平で怪我をした個体の保護記録があるだけである。

### 3. 生息環境

樹洞のある大木のある天然林や人工林(社寺林など)に生息するが、県内での樹洞ねぐらは確認されていない。埼玉県の市街地では新幹線高架下の隙間を 9 月から翌年 5 月まで最大 230 個体のねぐら利用がある。

### 4. 生息状況

2003 年以前、2004 年以降の調査ともに確実な記録は得られていない。2004 年以降、県内の高架橋などでのねぐら調査などを行ったが確実な生息情報は得られておらず、生息個体数は少ないと考えられる。なお、本種のものと思われる超音波音声は南アルプス及び富士山での調査で数回感知されているが、比較的高空を飛翔する特性から捕獲には至っていないものと考えられる。

### 5. 減少の主要因と脅威

過去 30 年以上前の 2 事例のみであることから減少の主要因は不明(99)であるが、生息の安定・増加を妨げる森林伐採や社寺林の樹洞伐採等によるねぐらの減少(11)、風力発電施設への衝突死(バットストライク)(26)は脅威と推察される。

### 6. 保護対策

京都府において「ヤマコウモリ保全回復事業計画」が策定されている。県内では生息場所の把握のための調査の継続とともに、原生林の保全や樹齢の高い大木の保護などが求められる。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

Kagei, N., I. Sawada & T. Kifune (1979) Helminth Fauna of Bats in Japan XX. *Annotationes Zoologicae Japonenses*, 52: 54-62

京都府(2012) ヤマコウモリ保全回復事業計画. 京都府告示第 653 号 平成 24 年 11 月 13 日.

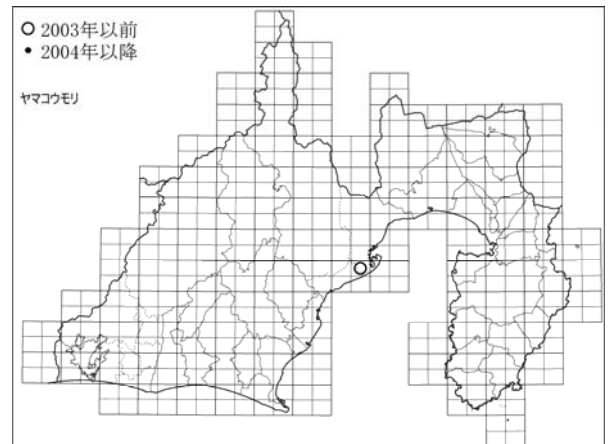
佐藤顕義・大沢夕志・大沢啓子・勝田節子(2013) 埼玉県におけるヤマコウモリ(*Myctalus aviator*)の越冬生態 1 上越新幹線における分布と季節移動. 埼玉県立自然の博物館研究報告, 7: 101-108

### 9. 標本

静岡県産標本の所在は不明。



©2019 T.Miyake  
埼玉県 2013年4月13日 三宅 隆



(佐藤顕義・三宅 隆)

# モリアブラコウモリ *Pipistrellus endoi* Imaizumi, 1959

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-ab)変更コード4

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

前腕長 30～33 mm、頭胴長 40～50 mm、尾長 28～39 mm、体重 5～9 g。皮膜は黒褐色で体毛は背面が濃い橙褐色。腹部は黄褐色。類似種のアブラコウモリとは本種の上顎犬歯が短く細く、後方の突起が大きいという点で異なる。陰茎骨は横から見て本種が直線状であるのに対し、アブラコウモリはS字状に湾曲している。日中のねぐらは樹洞や樹皮下を利用し、夜間、樹冠や河川上空で昆虫類を採餌する。

## 2. 分布

日本固有種で、本州及び四国に分布する。県内の記録は、2009年に静岡市葵区田代の標高2,000 m付近の林道で捕獲された1例のみである。

## 3. 生息環境

天然林などに生息しており、ブナ、スギなどの樹洞をねぐらや出産哺育のためのコロニーの形成場所としていることが観察されている。また、東京都では春季に標高200 m前後のスギ・ヒノキ林で確認され、宮城県では越冬期に海岸近くの標高4 mの洞穴で確認されている。県内では確認記録が少ないため生息環境は不明だが、針葉樹広葉樹混交林などの自然林に生息していると考えられる。

## 4. 生息状況

県内では南アルプスで1例が確認されているだけであるため、活動期及び越冬期の生息状況は不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

2003年以前の調査では確認がないため、減少の主要因は不明である(99)。隣接する長野県及び山梨県での近年の記録もない。自然林の伐採や開発行為によるねぐらの減少(11)が主な脅威と推察される。

## 6. 保護対策

本種における具体的な保護対策は知られていない。

## 7. 特記事項

今後は県内の生息場所を把握するための調査を行い、情報を収集する必要がある。

## 8. 主な文献

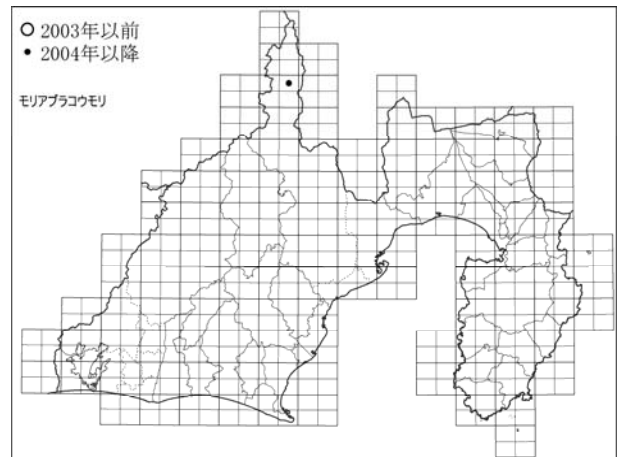
- 重昆達也・浦野守雄・安藤陽子・高木雄治(2006) 東京都奥多摩地域におけるモリアブラコウモリ *Pipistrellus endoi* の春季ねぐら(day roost)について. ANIMATE, 6: 19-26
- Kawai, K., M. L. Echenique-Díaz, O. Takahashi & C. Saito (2015) Insights into the Natural History of *Pipistrellus endoi* Imaizumi, 1959 from Survey Records in Miyagi Prefecture. *Research Bulletin of Environmental Education Center, Miyagi University of Education*, 17: 49-53
- 佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己(2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

## 9. 標本

静岡市葵区田代産 剥製♂：ふじのくに地球環境史ミュージアム



静岡市葵区田代 2009年7月18日 三宅 隆



(佐藤顕義・三宅 隆)

# ニホンウサギコウモリ *Plecotus sacrimontis* G. M. Allen, 1908

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-b)変更コード1

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

前腕長 37~44 mm、頭胴長 42~63 mm、尾長 41~58 mm、体重 6~11 g。体毛は灰褐~褐色で、耳介が大きい。日中のねぐらは樹洞を利用するが、洞窟や家屋で出産哺育集団を形成する事が多い。越冬期は洞穴などにおいて単独で見つかる場合が多く、確実な集団越冬地は知られていない。本州中部では6月中~下旬に1仔を出産する。再捕獲による生存記録は静岡県で4年が知られている。

## 2. 分布

国外ではイギリス、フランスから中国東北部に、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。西日本での記録は少なく、本県は主たる生息地の南限に当たる。県内では南アルプス（静岡市葵区、川根本町）及び富士山（富士宮市、小山町）で確認され、伊豆地域での記録はない。

## 3. 生息環境

南アルプスでは標高 500~2,050 m 程度、富士山では標高 700~1,600 m 程度の常緑針葉樹林帯などの森林内で確認されている。越冬期は隧道で少数が確認されている。

## 4. 生息状況

静岡市の既知出産哺育場所は、施設閉鎖のために利用できなくなった。また、小山町の廃屋は消失し、富士宮市の洞穴も利用しなくなり、県内の既知出産哺育場所はすべて消失した。森林内での捕獲事例は少なくないものの、出産哺育に利用されてきたねぐらが消失したため詳細は不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

出産哺育地の消失 (18) は生息個体数に大きな影響を与えると考えられる。また、森林の伐採 (11) はねぐらの消失につながり、脅威となると推察される。

## 6. 保護対策

山梨県では出産哺育場所に地下室を利用している本種のため、バットゲート（人は入れないがコウモリ類は通過できる柵）が設置されている。県内でも静岡市の既知出産哺育場所で再繁殖できるように、コウモリ類が通過できる柵部を施設の扉に設けることが必要である。

## 7. 特記事項

岩手県の龍泉洞で本種及びコキクガシラコウモリの集団越冬地が確認され「岩泉湧窟及びコウモリ」として国指定天然記念物に指定（1938年12月14日）されたが、本種は生息せずコキクガシラコウモリのみであった可能性が示唆されている。

## 8. 主な文献

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己（2012）静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

吉倉智子・村田浩一・三宅 隆・石原 誠・中川雄三・上條隆志（2009）ニホンウサギコウモリの出産保育コロニーの構造と繁殖特性. 哺乳類科学, 49: 225-235

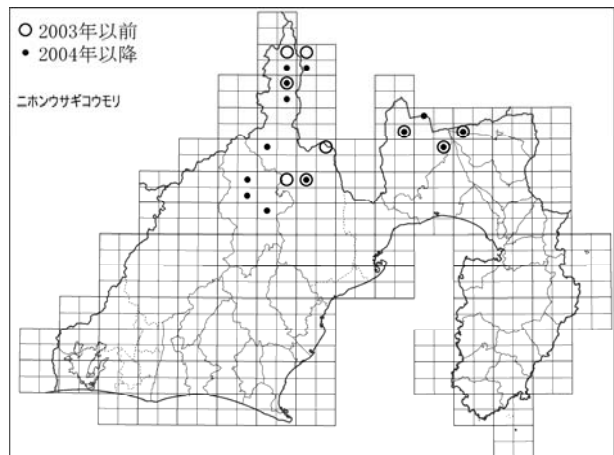
## 9. 標本

静岡市南アルプス産 剥製♀：ふじのくに地球環境史ミュージアム



©2019 T.Miyake

静岡市葵区田代 2015年8月15日 三宅 隆



(佐藤顕義・小長谷尚弘・三宅 隆)

## ヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* (Peters, 1880)

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-b)変更コード 1

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

前腕長 44~54 mm、頭胴長 60~79 mm、尾長 33~50 mm、体重 14~30 g。冬季は黒褐色の体毛に先端の白い刺毛が混ざり霜降り状。夏季のメスは明茶色。年 1 回初夏に 2 仔を出産する。日中のねぐらは樹洞や家屋などの人工物を利用し、夜間、比較的高空を飛翔して昆虫類を採餌する。近年、新幹線高架を集団で出産哺育や越冬に利用していることが判明している。再捕獲による生存記録は青森県で 11 年が知られ、青森県から京都府までの約 784 km を移動した事例がある。

### 2. 分布

国外ではシベリア東部、中国東部、台湾に、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では 2003 年に富士宮市の東京農業大学富士畜産農場で約 100 年ぶりに確認されている。その後、浜松市天竜区水窪町及び静岡市葵区で越冬集団が、南アルプスで単独個体が捕獲または目視で確認されている。

### 3. 生息環境

南アルプスの越冬集団は、常緑広葉樹林帯の隧道の繋ぎ目で 9 個体、家屋の隙間で 20 個体が確認されている。単独での確認事例のうち、静岡市葵区田代の記録（標高約 850 m）以外は比較的低標高地の記録である。

### 4. 生息状況

南アルプスでは集団越冬地が 2 ヶ所確認されたが、出産哺育に係る情報は得られていない。単独で確認された時期も越冬期前後の記録が多かった。富士山及び伊豆地域での確認はなく、2004 年以降に実施した高架橋などのねぐら調査でも確認がなかったことから、現状の生息個体数は少ないと考えられる。

### 5. 減少の主要因と脅威

これまでの確認記録が少なく、減少の主要因は不明である (99)。しかし安定・増加を妨げる森林伐採や社寺林の樹洞埋設等によるねぐらの減少 (11)、風力発電施設への衝突死 (26) は脅威と推察される。

### 6. 保護対策

青森県ではコウモリ専用の小屋が建設され、現在まで出産哺育が継続している。県内では活動期の生息状況調査や既知冬季確認場所の継続調査などを実施するとともに、可能な場合は青森県同様の人工的なコウモリ小屋の整備が望まれる。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

重昆達也・本多宜仁・佐藤顕義・三宅 隆 (2018) 静岡県西部の風力発電所で見つかったコウモリ類 2 種の死骸について. 東海自然誌, (11): 51-57

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己 (2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

佐藤顕義・谷本雅紀・重昆達也 (2017) 静岡県藤枝市におけるヒナコウモリの記録. 東海自然誌, (10): 67-69

土屋公幸 (2004) 農大富士畜産農場でヒナコウモリを保護. Animate 通信, (9): 1

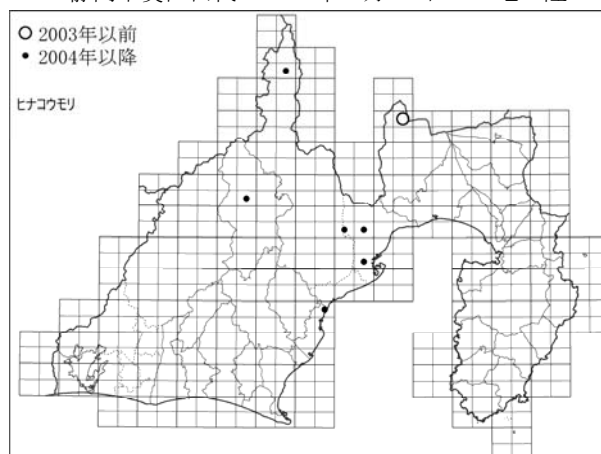
### 9. 標本

静岡市葵区産 剥製: ふじのくに地球環境史ミュージアム



©2019 T.Miyake

静岡市葵区田代 2014 年 6 月 18 日 三宅 隆



(佐藤顕義・三宅 隆)

### 1. 種の解説

前腕長 36~42 mm、頭胴長 41~55 mm、尾長 37~46 mm、体重 6~11 g。体毛は黒褐色または褐色。類似種のヒメホオヒゲコウモリと比較して、本種は下腿長が 17 mm 以上と長い。日中のねぐらは主に樹洞を利用し、夜間に飛翔する昆虫を採餌する。新潟県及び石川県などでは隧道を集団でねぐらとして利用している。再捕獲による生存記録は石川県で 14 年、長野県で 17 年が知られている。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島及び中国とロシアの一部に分布し、国内では中部以北の本州、北海道に分布する。静岡県は主たる分布の南限に当たる。県内では 1975 年 7 月 25 日の富士山麓での捕獲記録があるが詳細は不明である。南アルプスでは 1999 年に静岡市葵区田代の大井川上流標高 1,850 m 付近の東俣で確認され、その後 2012 年東俣、2015 年樫島で確認された。富士山では山梨県側でも確認されている。

### 3. 生息環境

確実な生息環境は、大井川上流域の針葉樹、落葉樹の混交林である。

### 4. 生息状況

県内では南アルプスのみで確認されており、局所的に生息している可能性が考えられるが、詳細は不明である。

### 5. 減少の主要因と脅威

確認場所と確認数が少ないため減少の主要因は不明 (99) であるが、南アルプスは国内の南限に当たることから、元来、生息個体数が少ない種であるのかもしれない。しかし、局所的に分布している可能性があり、自然林の伐採や開発行為によるねぐらの減少 (11) が脅威になると推察される。

### 6. 保護対策

本種における具体的な保護対策は知られていない。今後は県内の生息場所の把握のための調査などを行い、情報を収集する必要がある。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

Kagei, N., I. Sawada & T. Kifune (1979) Helminth Fauna of Bats in Japan XX. *Annotationes Zoologicae Japonenses*, 52: 54-62

山本輝正・松本和馬 (2016) カグヤコウモリ (*Myotis frater*) オス個体群の 21 年間にわたる個体群調査. 哺乳類科学, 56: 135-144

吉行瑞子 (1971) 富士山の翼手類. 黒田長久編, 富士山地域の動物相 (in 富士山総合学術調査報告書), pp.829-833. 富士急行株式会社・財団法人堀内浩庵会, 富士吉田.

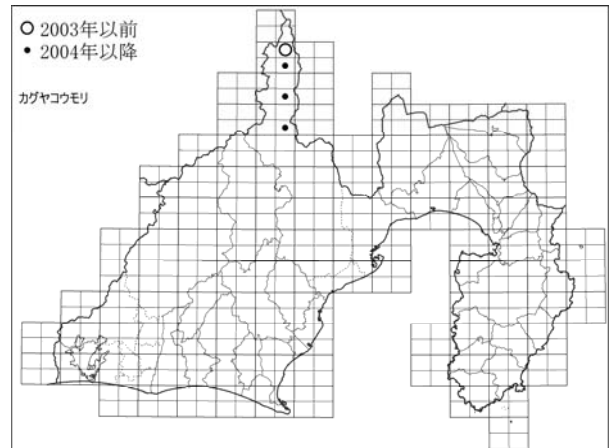
### 9. 標本

静岡市南アルプス産 剥製♀ : ふじのくに地球環境史ミュージアム

(佐藤頭義・三宅 隆)



静岡市葵区田代 2012年7月16日 三宅 隆



# クロホオヒゲコウモリ *Myotis pruinosus* Yoshiyuki, 1971

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-b)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

前腕長 30~35 mm、頭胴長 37~45 mm、尾長 31~40 mm、体重 3~5 g。体毛は黒褐~灰黒褐色で背面に先端が銀色の刺毛をもち、類似種のヒメホオヒゲコウモリと比較して腿間膜の血管走行線は直線的。森林内で捕獲される場合が多いため、日中のねぐらは主に樹洞を利用していると考えられているが、愛媛県、熊本県及び滋賀県では隧道をねぐらとして利用している。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州から知られるが、確認記録は少ない。県内では南アルプス（静岡市葵区、川根本町、浜松市天竜区水窪町）のみで確認されている。

## 3. 生息環境

ホオヒゲコウモリ属中、南方系の種群に属する。夏緑広葉樹林帯下部に生息し、それ以上の高地に住むヒメホオヒゲコウモリと住み分けすると考えられている。県内では標高 600 m 程度での確認が多かったが、静岡市の標高約 2,000 m 及び 1,500 m の常緑針葉樹林帯でも捕獲され、ヒメホオヒゲコウモリと同所的に生息している場所も存在する。

## 4. 生息状況

南アルプスでは浜松市の森林内で当歳獣が捕獲されている。2014年11月には川根本町の標高 600 m 付近の隧道で1個体が確認された。局所的に確認され、個体数は少ないものの、山間地の河川沿いに広く分布している可能性が考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

確認場所と確認個体数が少なく、減少の主要因は不明 (99) であるが、主たる生息環境が低標高地の自然林が残る河川沿いや急斜面地であることから、自然林の伐採や開発行為によるねぐらの減少 (11) が脅威になると推察される。

## 6. 保護対策

本種における具体的な保護対策は知られていない。今後は県内の生息場所把握のための調査などを行い、情報を収集する必要がある。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

前田喜四雄 (2001) 日本コウモリ研究誌. 東京大学出版会, 東京, 203 pp.

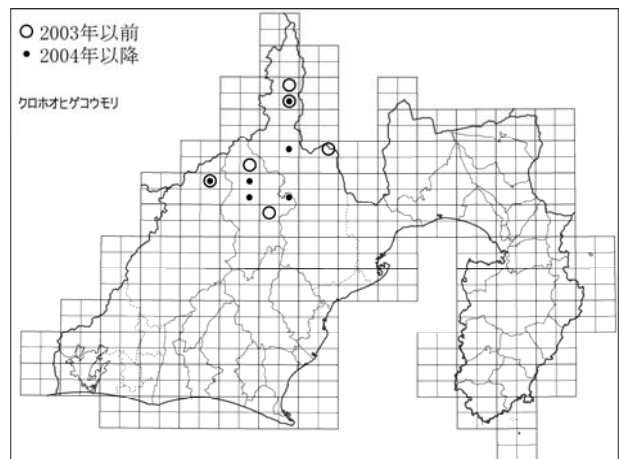
佐藤頭義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己 (2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

## 9. 標本

川根本町産 剥製♂♀ : ふじのくに地球環境史ミュージアム



静岡市葵区田代 2010年8月26日 三宅 隆



(佐藤頭義・三宅 隆)

# テングコウモリ *Murina hilgendorfi* (Peters, 1880)

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-b)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし ]

## 1. 種の解説

前腕長 40~46 mm、頭胴長 47~70 mm、尾長 32~47 mm、体重 8~19 g。体毛は背面が灰褐色で銀色に長毛がまばらに生える。腿間膜の上面は長毛が密生する。鼻孔先端は管状で左右に広がる。日中のねぐらは生葉、枯葉、洞穴、橋や廃屋などを利用する。夜間に林内を飛翔し、地表付近の昆虫類を採餌することがある。再捕獲による生存記録は山口県で7年11カ月が知られる。

## 2. 分布

国外では東南アジア、中国、サハリンなどに広く、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内の確認例は少ないが、南アルプスで主に確認されているほか、富士地域及び伊豆地域でも記録がある。

## 3. 生息環境

南アルプスでは、活動期及び越冬期に常緑広葉樹林帯上部を中心に確認され、富士山でも同様の環境で生息していると考えられる。伊豆地域では、松崎町の標高 100 m 程度にある廃坑で確認されている。南アルプスの長野県側では、周辺にスギ・ヒノキ林が分布する隧道に5月から集まりだし、隧道を出産哺育場所に利用していたことが報告されている。

## 4. 生息状況

南アルプス及び富士山では、常緑広葉樹林帯に広く分布する可能性があるが、当該樹林帯上部の記録が中心である。富士宮市の溶岩洞窟では2006年6月11日に9頭の群塊が確認されたが、その後は確認されていない。伊豆地域では2004年以降の記録がない。

## 5. 減少の主要因と脅威

確認事例は多くないが、南アルプス及び富士山地域での減少は見られていない。伊豆地域では今回の調査期間では確認がなかった。減少の主要因は不明 (99) であるが、森林内に強く依存している傾向があることから、森林伐採によるねぐらの減少 (11)、森林の分断や開発による移動阻害と餌昆虫類の減少 (11、23、24) が脅威となる。

## 6. 保護対策

本種の具体的な保護対策は知られていないが、巣箱を用いた調査で確認される場合があるため、一時的な保護対策として有効となる可能性がある。今後は県内の生息場所把握のための調査を行い、特に伊豆地域の情報を収集する必要がある。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

佐藤顕義・勝田節子 (2006) 天竜川水系で確認したテングコウモリ *Murina leucogaster* の繁殖と周年動態. コウモリ通信, 15(1): 2-5

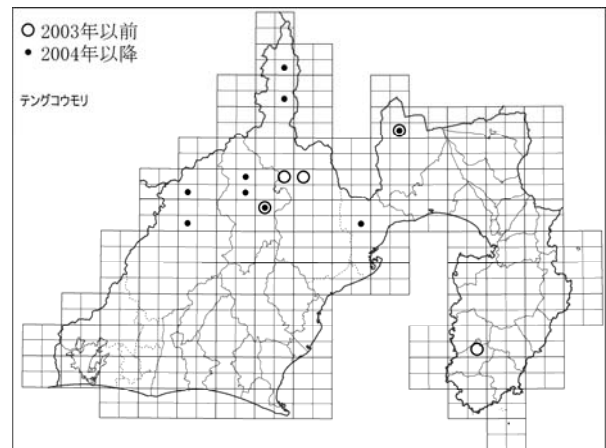
佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己 (2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

## 9. 標本

川根本町産 剥製: ふじのくに地球環境史ミュージアム



川根本町 2013年9月7日 三宅 隆



(佐藤顕義・三宅 隆)

### 1. 種の解説

前腕長 28~35 mm、頭胴長 41~54 mm、尾長 26~33 mm、体重 4~8 g。体毛は背面が明茶色で腹面は白色。腿間膜の上面に長毛を密生する。鼻孔先端は管状で左右に広がる。日中のねぐらは樹皮の下、広葉の中、洞穴内、家屋内などを利用し、夜間に林内を飛翔する昆虫類を採餌する。冬季は洞穴内で見つかる場合が多い。再捕獲による生存記録は鹿児島県でオス4年、メス4年半が知られている。

### 2. 分布

国外ではシベリア東部及び北東部などに、国内では北海道、本州、四国、九州、屋久島に分布する。県内では南アルプスや富士山で記録があり、伊豆地域では確認されていない。南アルプスでは活動期に標高 450~2,450 m の範囲で確認され、出産哺育情報もえられている。

### 3. 生息環境

南アルプス及び富士山では、活動期に常緑広葉樹林帯上部から常緑針葉樹林帯まで分布している。冬季は南アルプスにおいて標高 450~700 m 程度の隧道を越冬ねぐらとして利用している。

### 4. 生息状況

南アルプス及び富士山では、常緑広葉樹林帯から上部の範囲に広く生息していると考えられるが、出産哺育が示唆された場所は2ヶ所のみである。伊豆地域では記録がないが、元々生息していないか絶滅したかは不明である。

### 5. 減少の主要因と脅威

前回調査と比較して確認地点は増加しているが、森林の伐採(11)や植生の単一化によるねぐら環境の減少(71)及び開発行為による餌昆虫類の減少(23、24)が脅威となる。

### 6. 保護対策

本種の具体的な保護対策は知られていない。ただし、枝葉トラップを用いた調査でも確認されていることから、一時的な保護対策として有効になる可能性がある。今後は県内の生息場所の把握のための調査及び冬期確認場所の継続的調査などを行い、特に伊豆地域の情報を収集する必要がある。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

船越公威・長岡研太・竹山光平・犬童まどか(2009)コテングコウモリ *Murina ussuriensis* におけるアカマガシワトラップのねぐら利用と繁殖生態. 哺乳類科学, 49: 245-256

佐藤顕義・勝田節子・山本輝正(2010)南アルプス地域におけるコテングコウモリの分布とねぐら利用. 森林野生動物研究会誌, 35: 33-41

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己(2012)静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

### 9. 標本

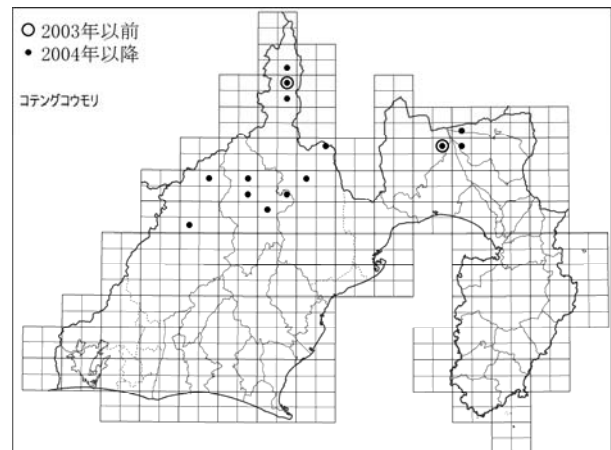
静岡市葵区南アルプス産 剥製: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(佐藤顕義・三宅 隆)



©2019 T.Miyake

静岡市葵区田代 2012年7月12日 三宅 隆





### 1. 種の解説

頭胴長 68~84 mm、尾長 44~54 mm、体重 14~20 g。小さな体に大きな目と平らな顔、フサフサとした尾、背中の黒筋などが特徴である。冬期は樹洞などで丸くなって冬眠する。夜行性で、樹上を移動し、昆虫、液果や果実、種子などを食べる。1属1種で国の天然記念物に指定されている。

### 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州、隠岐に断続的に分布する。県内では低山帯から亜高山帯まで広く分布すると思われるが、確認例は多くない。聖平小屋や井川県民の森などの南アルプスに点在するほか、伊豆市、小山町、富士宮市などで記録されている。

### 3. 生息環境

本州の中部地帯以北の山地に多く生息し、山地帯から亜高山帯の落葉広葉樹林が主な生息地とされてきた。しかし近年、暖温帯低標高の常緑広葉樹林でも多数発見されている。

### 4. 生息状況

情報が不足しているため、生息状況は不明である。

### 5. 減少の主要因と脅威

情報が不足しているため、生息数や、生息地の状況が判らず、要因と脅威について現時点ではコメントできない (99)。

### 6. 保護対策

特別な保全対策は行われていない。

### 7. 特記事項

「日本特有の動物で著名なもの及びその棲息地」として国指定天然記念物 (昭和 50 年 6 月 26 日指定) に指定されている。

### 8. 主な文献

春田亜紀 (2005) ヤマネ. 静岡県自然環境調査委員会哺乳類部会 編, 静岡県の哺乳類【資料編】, pp. 76-77. 同会, 静岡.

中島福男 (2001) 日本のヤマネ. 信濃毎日新聞社, 長野, 169 pp.

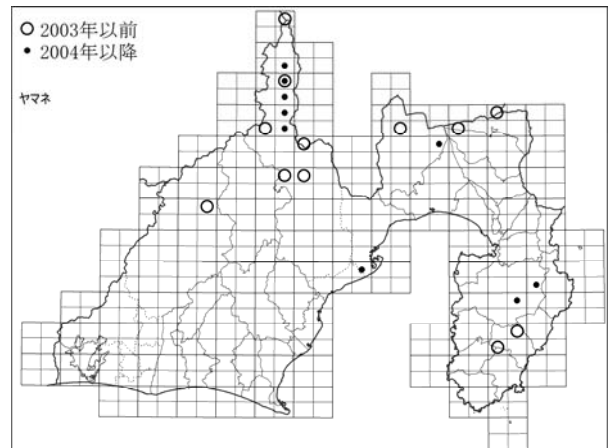
鳥居春己 (1989) 静岡県の哺乳類. 第一法規出版, 東京, 231 pp.

### 9. 標本

なし。



©2019 T. Miyake  
静岡市葵区井川 2011年2月8日 三宅 隆



(大場孝裕)

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-a)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

頭胴長 14~20 cm、尾長 10~14 cm、体重は 150~220 g。大きな目と、前後肢の間の皮膜で滑空するのが特徴である。植物食で、木の葉や芽、花、果実、樹皮などを食べる。樹上で生活し、巣は天然の樹洞やキツキ類の古巣を利用する。比較的高地に多く、夜行性の小型種であり、樹上で活動するため生息確認が難しい。

### 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州に分布する。県内では、天城峠、富士山、南アルプス前衛の山地から大井川の上流域で記録があり、低山帯から亜高山帯までの森林に分布すると思われる。

### 3. 生息環境

比較的標高の高い森林地帯に生息していると考えられるが、確認例が少なく、生息環境の詳細は不明である。人家に近い場所での確認例はなく、これはムササビとの競合の影響が考えられる。

### 4. 生息状況

2003年以前に実施したレッドデータブック作成のための調査では、伊豆天城峠、富士山須走5合目、南アルプスの樫島、浜松市天竜区水窪町戸中林道などで記録がある。2004年以降は、静岡市葵区の中山間地から南アルプスにかけて記録がある。県内の山地森林に広く生息すると思われるが確認例が少なく、詳細な生息状況は不明である。

### 5. 減少の主要因と脅威

生息状況などについての情報が不足しているため、減少要因と脅威については不明 (99) である。

### 6. 保護対策

間伐の減少によりスギ人工林の高齢大径化が生じており、各所でキツキ類の営巣 (穿孔) が確認されている。本種を含む2次樹洞営巣種の生息環境の増加が期待できる。

### 7. 特記事項

静岡県環境影響評価条例に基づく環境アセスメントの調査結果等も活用することが望まれる。

### 8. 主な文献

川道武男 編 (1996) 日本動物大百科 I 哺乳類 I. 平凡社, 156 pp.

春田亜紀・三宅 隆・大場孝裕 (2005) ホンドモモンガ. 静岡県自然環境調査委員会哺乳類部会 編, 静岡県の哺乳類【資料編】, pp. 72-73. 同会, 静岡.

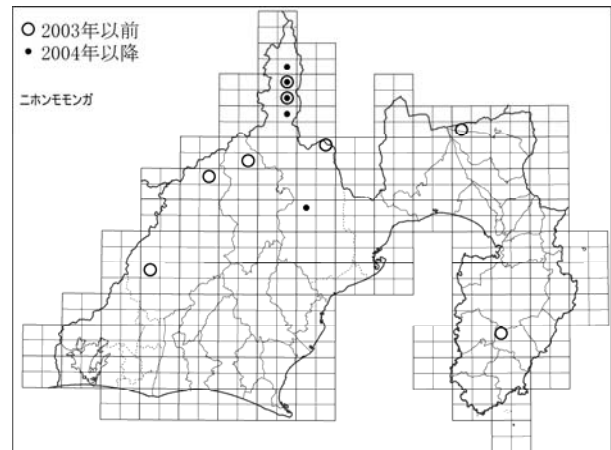
鳥居春己 (1989) 静岡県の哺乳類. 第一法規出版, 東京, 231 pp.

### 9. 標本

静岡市葵区産: ふじのくに地球環境史ミュージアム



©2019 T.Miyake  
静岡市葵区横沢 2008年12月19日 三宅 隆



(大場孝裕)

### 1. 種の解説

オスは頭胴長 182~198 mm、尾長 48~67 mm、体重 200 g 程度。メスはオスに比べて少し小さい。胴長短足で、毛色は腹面が白色で尾の先端は黒色、夏毛の背面は濃い茶褐色で冬毛は白色となる。肉食でネズミ類やモグラ類などの小型哺乳類、鳥類とその卵、昆虫類を主に捕食する。肉食で同性に対して数十 ha のなわばりを形成するため、生息密度は低い。

### 2. 分布

国外ではユーラシア北部と北アメリカに広く分布し、国内では北海道と本州中部以北の山地帯上部から高山帯に分布する。県内では 2001~2002 年に行ったアンケート調査で、南アルプスでは標高 1,000 m 付近から 3,189 m の間ノ岳山頂直下で目撃情報がえられた。また、情報は少ないが、富士山にも分布している。

### 3. 生息環境

南アルプスの稜線登山道やガレ場での目撃情報が多く、水場のほか山小屋でも目撃されている。体つきを活かし、主な餌の一つであるネズミ類やモグラ類などを捕食しやすい地表や石の隙間が多いところを好んで利用していると考えられる。

### 4. 生息状況

2001~2002 年に行ったアンケート調査では、南アルプス全域で目撃情報がえられている。

### 5. 減少の主要因と脅威

生息域は限られるが、環境が大きく改変される危険性は低い。生息密度が低いいため、減少した場合に個体群が維持されていくのか心配されるが、その要因と脅威は不明 (99) である。

### 6. 保護対策

本種の生息地にもなっている南アルプスの稜線部周辺は、国立公園特別保護地区や特別地域に指定され、土地の改変や森林伐採が規制されている。

### 7. 特記事項

静岡県は、国内の生息域の南限となっている。

### 8. 主な文献

大橋正孝 (2005) オコジョ. 静岡県自然環境調査委員会哺乳類部会 編, 静岡県の哺乳類【資料編】, pp.121-122. 同会, 静岡.

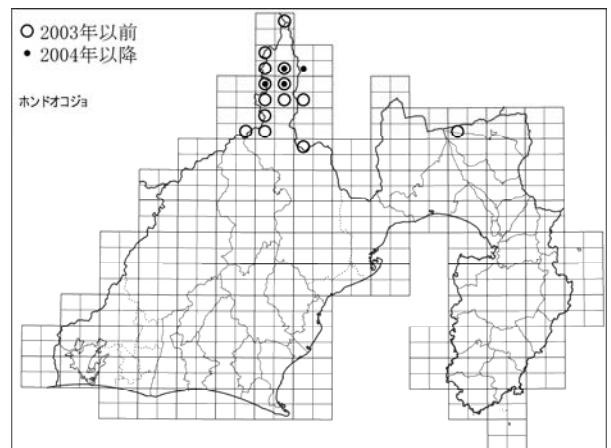
鳥居春己 (1989) 静岡県の哺乳類. 第一法規出版, 東京, 231 pp.

### 9. 標本

なし。



©2019 M.Sato  
静岡市葵区井川県民の森 2008年12月21日 佐藤元一



(大場孝裕・三宅 隆)

# オヒキコウモリ 伊東の個体群 *Tadarida insignis* (Blyth, 1861)

オヒキコウモリ科 Molossidae

静岡県カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) (要件①)変更コード4

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

前腕長 57～66 mm、頭胴長 81～94 mm、尾長 46～58 mm、体重 30～45 g。日本に生息する食虫性コウモリの中で最も大型。耳介は丸くて大きい。尾が長く、翼は狭長で高空を高速度で飛翔することができる。国内では広島県の学校校舎のつなぎ目で確認された 500 頭前後の出産哺育集団が最大である。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、台湾に分布する。国内では北海道から九州までの広い範囲で確認されているが、死体などが偶然拾得された記録が多い。国内では 1996 年に宮崎県批榔島で最初に出産哺育集団が確認され、ねぐらから 3.5 km 離れた林冠上で採餌していることが示唆されている。高知県、京都府及び広島県でも集団が確認されている。近年、九州では新幹線高架でねぐらが発見された。県内では 2009 年に伊東市城ヶ崎海岸に生息するアマツバメの調査に訪れた研究者によって、海岸から離れた岩礁の隙間で群れが発見された。



伊東市 2010年 大沢夕志

## 3. 生息環境

発見されたねぐらは洋上の岩礁で、現在でも夏季は岩礁の亀裂隙間をアマツバメと共存してねぐらを利用している。

## 4. 生息状況

県内で確認されている生息地は伊東市の 1ヶ所だけで、最大で 200 頭前後がねぐらに利用している。1 年を通じてねぐらとして利用しているが、出産哺育場所となっているかは不明である。日没 30 分から 1 時間後に出巢し、海岸沿いを飛翔しながら主に広い空間で採餌している。超音波音声調査では、伊豆半島の他の地域でも生息している可能性が確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

確認されているねぐらは人が容易に近づけない場所であり、減少の脅威は少ないと考えられる。しかし、採餌環境として高空を利用していることから風力発電施設への衝突死 (26) が脅威となる。

## 6. 保護対策

本種における具体的な保護対策は知られていない。確認されたねぐらでの個体数モニタリング及び出産哺育の確認、県内の他の生息場所の把握、風力発電施設における衝突死の把握を実施する必要がある。

## 7. 特記事項

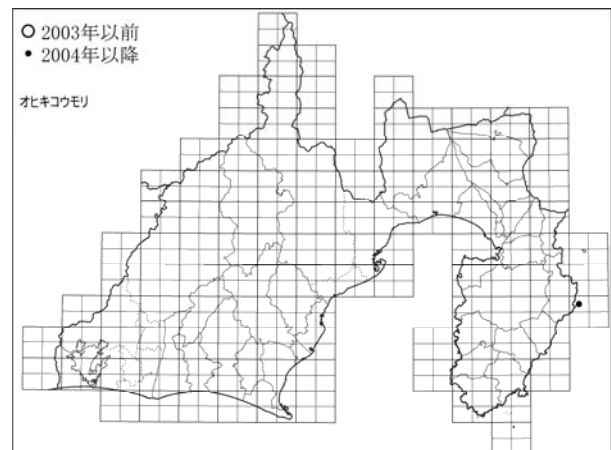
確認されたねぐらはアマツバメ集団生息地として伊東市指定天然記念物に指定されている。同じ岩礁の隙間を、アマツバメとオヒキコウモリが共有している状況は、国内的にも珍しいと考えられる。

## 8. 主な文献

佐藤顕義・三宅 隆・山本輝正・大場孝裕・中川雄三・大沢夕志・大沢啓子・山口喜盛・山口尚子・吉倉智子・高山壽彦・勝田節子 (2011) 静岡県伊東市城ヶ崎海岸燕黒岩におけるオヒキコウモリの集団ねぐら. コウモリ通信, 18(1): 2-4

## 9. 標本

なし。



(佐藤顕義・三宅 隆)

## ニホンザル 伊豆・愛鷹・熱海地域の個体群 *Macaca fuscata* (Blyth, 1875)

(=2004年版のニホンザル(熱海、伊豆地域の個体群))

オナガザル科 Cercopithecidae

静岡県カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) (要件①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

頭胴長 50~60 cm、体重 10~18 kg で、メスはオスに比べてやや小さい。尾は短く、体毛は茶褐色で顔と尻が裸出して赤い。10 数~100 頭以上の群れで 1 年を通して数~数十km<sup>2</sup>の範囲を遊動する。群れは複数の成獣のオスを含む母系集団。オスは生後数年で群れを離れ、単独行動になる。植物主体の雑食性。

### 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州、屋久島に分布する。県内では富士川以西、愛鷹山麓、伊豆半島東南部と熱海市以東に群れが連続分布する。富士川以東では、森林域の分断、針葉樹林化による生息地の質の低下及び被害防止目的の捕獲の影響などから群れ分布の孤立化が進行し、地域的な絶滅が懸念される。

### 3. 生息環境

常緑及び落葉広葉樹林を中心に生息する。南アルプスでは、ハイマツやお花畑も利用する。開発などで広葉樹林が少ない地域では、農林作物への依存度が著しく高くなり耕作地が利用の中心となっている。

### 4. 生息状況

伊豆地域の群れの情報は、1981年の旧12市町村から1993年の旧6市町村まで減少した。愛鷹地域には春山川・須津川沿いを中心に複数の群れが生息するが、他の地域から孤立している。熱海地域(熱海市北部~神奈川県南西部)の個体数は、1990年頃に200頭を超えていたが現在100頭以下にまで減少している。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種の好適生息環境である広葉樹林の減少により、耕作地等作物への依存度が著しく高くなったこと(71)、被害の深刻化に伴い耕作地周辺で強度の捕獲圧(41)が掛かったことなどが、分布の縮小や個体数減少の主要因と考えられる。今後も被害が続く、過度の捕獲圧がかかると個体群の存続は厳しくなる。

### 6. 保護対策

群れの連続分布を妨げる開発や捕獲の回避、耕作地等の作物に依存せずに生活できる生息環境の整備、防護柵と追い払い等による耕作地に近づけない管理、被害防止のための捕獲の最小化が必要と考えられる。

### 7. 特記事項

mtDNAのDループ可変域、約412塩基対を比較分析した結果から、富士川以西地域、愛鷹地域、伊豆地域、熱海地域は、それぞれ他地域と異なるハプロタイプであることが明らかになっている。

### 8. 主な文献

静岡県生活・文化部自然保護課(1996)静岡県ニホンザル調査報告書—分布・被害の実態と被害回避対策の方向性—。静岡県, 41 pp.

Kawamoto, Y., T. Shotake, K. Nozawa, S. Kawamoto, K. Tomari, S. Kawai, K. Shirai, Y. Morimitsu, N. Tagi, H. Akaza, H. Fujii, H. Hagihara, K. Aizawa, S. Akachi, T. Oi & S. Hayaishi. (2007) Postglacial population expansion of Japanese macaques (*Macaca fuscata*) inferred from mitochondrial DNA phylogeography. *Primates*, 7: 94-103

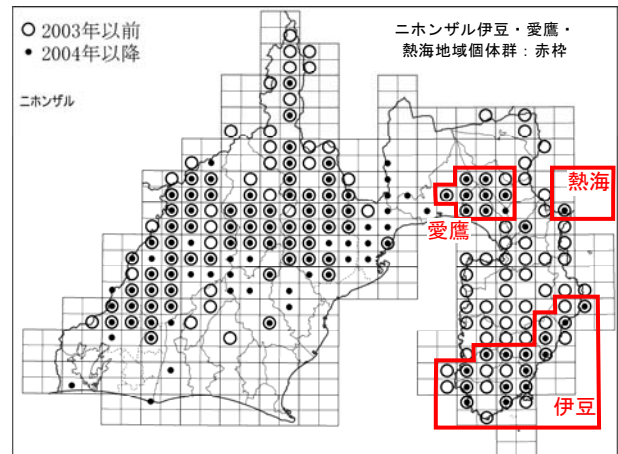
### 9. 標本

静岡市葵区梅ヶ島産: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(大橋正孝・三宅 隆)



南伊豆町波勝崎 2015年6月13日 三宅 隆



# ツキノワグマ 富士地域の個体群 *Ursus thibetanus* G. Cuvier, 1823

クマ科 Ursidae

静岡県カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) (要件①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)

: 環境省カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) (静岡県該当なし)]

## 1. 種の解説

頭胴長 120~145 cm、体重 70~120 kg。県内最大の陸上哺乳類である。全身黒色で、胸部の白い三日月形の斑紋は個体により異なり識別に利用できる。雑食性で、春には若芽や草本類、夏には果実や昆虫類、秋には堅果類を多く摂食する。樹洞などで冬眠する。

## 2. 分布

国外ではヒマラヤの南側山麓部から東南アジア北部、中国東北部、台湾など、国内では本州、四国に分布する。九州では絶滅した可能性が高い。県内では、県中・西部と富士地域に分布し、伊豆地域では絶滅した。移動能力は高く、秋季に 20 km 以上を往復した県内追跡個体もいた。

## 3. 生息環境

山地帯のミズナラなどの落葉広葉樹林を中心に生息する。富士地域は天然林の面積が少なく分断化されているため生息環境が限られ、頭数も少ないと考えられる。本地域では、木が傾いて浮いた根の下にできた隙間や溶岩樹型の中での冬眠も確認されている。

## 4. 生息状況

県中・西部では 1992 年以降分布拡大や個体数増加が推察されるが、富士地域では富士山、天子ヶ岳～毛無山、三国山～不老山で生息が確認されているものの、愛鷹山では 2006 年の確認を最後に生息情報がない。

## 5. 減少の主要因と脅威

富士地域は生息に適した落葉広葉樹林が少なく、森林の不連続性(23、24)も負の要因である。加えて、ニホンジカの採食圧による林床植物の衰退に伴い、食物資源の減少、カバー(遮蔽)の喪失が生じている(71)。さらに、ニホンジカ捕獲用の足くりわなに本種が錯誤捕獲(41)されている。

## 6. 保護対策

狩猟獣だが、静岡県猟友会は 1992 年から狩猟による捕獲を自粛している。足くりわな、箱わなで錯誤捕獲された場合は、放獣に努めている。県は、被害防止目的の捕獲について、市町に許可権限を移譲していない。また、原則、県中・西部のクマハギ(造林木の樹皮はぎ)被害に対してのみ捕獲許可を出している。

## 7. 特記事項

愛鷹山では、2016 年に愛鷹山～前岳稜線、裾野大沢、須津川など 15ヶ所での誘引を伴う自動撮影と聞き取り調査を行ったが、生息情報はえられなかった。

## 8. 主な文献

静岡県(1978)第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(哺乳類). 24 pp.

静岡県環境部自然保護課・静岡県林業技術センター・(株)野生動物保護管理事務所(1998)特定鳥獣生息調査報告書-静岡県におけるツキノワグマの生息実態-. 20 pp.

静岡県林業技術センター・静岡県環境森林部自然保護室・静岡県野生動物研究会(2005)静岡県ツキノワグマ生息調査報告書(1998~2002年度). 104 pp.

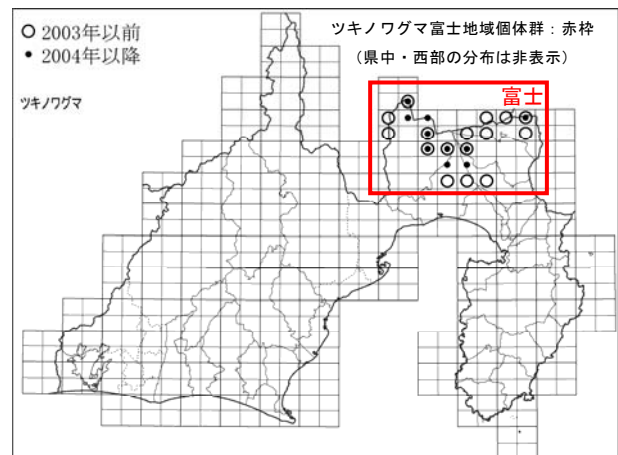
## 9. 標本

静岡市葵区産: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(大場孝裕)



静岡市葵区田代二軒小屋 2015年7月15日 三宅 隆



## ヒメホオヒゲコウモリ *Myotis ikonnikovi* Ognev, 1912

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更コード11

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

前腕長 31~36 mm、頭胴長 39~55 mm、尾長 31~41 mm、体重 4~8 g。体毛は黒褐~茶褐色で背面の先端は金属光沢を帯びる個体もいる。国内では4種または4亜種(エゾ、シナノ、オゼ、フジホオヒゲコウモリ)に分類する意見もある。類似種のクロホオヒゲコウモリと比較して腿間膜の血管走行線は「く」の字状。日中のねぐらは主に樹木の樹皮下や幹の割れ目を利用するが、隧道などの人工物も利用する。再捕獲による生存記録は5年が知られている。

### 2. 分布

本州及び四国に分布する。静岡県は主たる生息分布の南限に当たる。県内では富士山(富士宮市、御殿場市、小山町)及び南アルプス(静岡市、浜松市、川根本町)で確認されている。伊豆地域での確認はない。

### 3. 生息環境

標高 500~600 m 以上の常緑広葉樹林帯から標高約 2,000 m の常緑針葉樹林帯で広く確認され、出産哺育は標高約 700~2,200 m の範囲で確認された。主として広葉樹・針葉樹の混交林、特に天然林に依存して生息するようである。越冬期は標高約 500 m の隧道を利用していた。

### 4. 生息状況

今回の調査でも伊豆地域では確認されず、活動期の主な生息地は南アルプス及び富士山の森林地帯のみであった。一部はクロホオヒゲコウモリと同じ場所で確認された。さらに2007年7月10日に川根本町の隧道で標識されたオス個体が、同所において2014年11月8日に再捕獲され、約7年4カ月の生存記録がえられた。

### 5. 減少の主要因と脅威

減少の主要因は不明(99)であるが、比較的天然林が残る地域で確認されていることから、良好な森林の指標種になると考えられ、森林の伐採によるねぐらの消失(11)が脅威になると推察される。

### 6. 保護対策

本種における具体的な保護対策は知られていない。今後は県内の生息場所把握のための調査などを行い、特に伊豆地域の情報を収集する必要がある。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

佐藤顕義・勝田節子・山本輝正(2011)南アルプス地域におけるヒメホオヒゲコウモリの分布とねぐら利用. 森林野生動物研究会誌, 36: 1-7

佐藤顕義・三宅 隆・佐々木彰央・高山壽彦(2014)標識5年後に再捕獲されたヒメホオヒゲコウモリ. 東海自然誌, (7): 31-33

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己(2012)静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

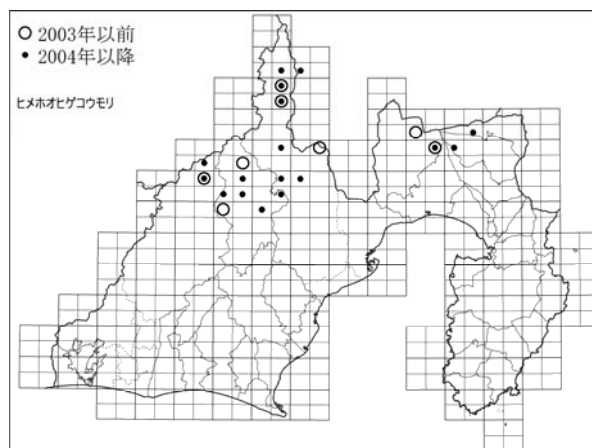
### 9. 標本

静岡市葵区田代産 剥製♂♀: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(佐藤顕義・三宅 隆)



©2019 T.Miyake  
静岡市葵区田代 2012年7月15日 三宅 隆



# ハタネズミ *Microtus montebelli* (Milne-Edwards, 1872)

ネズミ科 Muridae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更コード5

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

頭胴長 9.5~13.6 cm、尾長 2.9~5.0 cm、体重 22~62 g。  
背面の毛色は茶色または灰黄赤色で、腹面は灰白色となる。通常春と秋に繁殖期があり、1回の出産で3~8頭の子どもを産み、直後に再び妊娠し、繁殖期に2~4回出産する。このため、条件がよいと個体数は急速に増える。捕食者はイタチ、キツネ、ヘビなどである。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、九州、佐渡島、能登島に分布する。鳥居(1989)によると、県内では伊豆地域、富士地域の多数の場所で捕獲により確認されているほか、南アルプス地域や遠州灘海岸付近で記録がある。

## 3. 生息環境

陽あたりのよい伐採地や造林地、牧草地、高山のハイマツ帯、河川敷や田畑などの地表から地中約50 cmの間に、網目状の巣穴を掘り生活している。草食性で、秋になると巣穴に食料を貯える。

## 4. 生息状況

過去には時々大発生が見られ、イネ、サツマイモなどの根菜、造林木や果樹の樹皮はぎ被害を引き起こしていた。1960年から1970年頃には、年間数千haの造林地被害が発生していたが、2006年以降は造林地における被害報告はない。2003年以前に実施したレッドデータブック作成のための調査では3ヶ所でしか確認されておらず、生息に適した環境での調査でも本種が捕獲できない場所が多かった。2004年以降の調査では1頭も捕獲できず、また生息情報もえられなかった。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種が好む草地的環境の減少(16)が主要な要因として考えられるが、残存する草地的環境でも本種の確認が難しくなっていることから、別の要因(99)が影響している可能性がある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

静岡県環境影響評価条例に基づく環境アセスメントの調査結果など(未捕獲も含めて)の記録を有効に利用することが望まれる。2014年頃から県中・西部でスズタケの一斉開花が確認されており、結実が本種の増加に寄与する可能性もある。

## 8. 主な文献

鳥居春己(1989) 静岡県の哺乳類. 第一法規出版, 東京, 231 pp.

三宅 隆(2005) ハタネズミ. 静岡県自然環境調査委員会哺乳類部会 編, 静岡県の哺乳類【資料編】, p.82. 同会, 静岡.

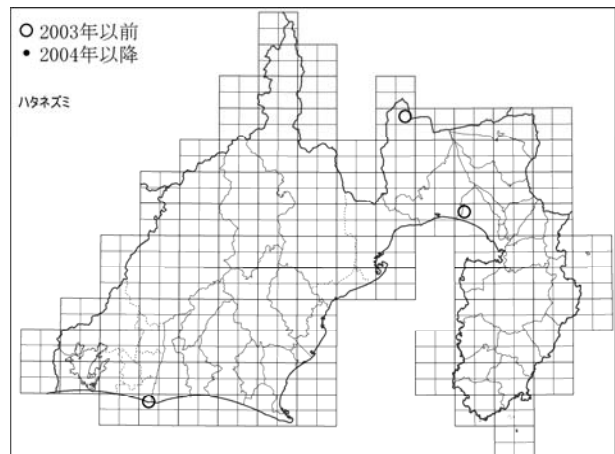
## 9. 標本

富士宮市産：ふじのくに地球環境史ミュージアム



©2019 H.Ishikawa

富士宮市産 1983年12月8日 石川 均



(大場孝裕)



静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

頭胴長 18~20 cm、尾長 15~17 cm、体重 210~310 g。夏毛の一部は赤褐色、冬毛は灰褐色になり、耳の先の毛が伸びる。腹は純白である。昼行性。樹上に木の枝や樹皮で、鳥のような球形の巣を作る。食性は種子、果実など植物食だが、昆虫や野鳥の卵なども食べる。春から夏に 1~2 回出産する。

### 2. 分布

日本固有種で、本州、四国に分布する。西日本には少なく、九州では 1970 年代以降確実な生息情報がない。県内ではアカマツ林の残る県立森林公園（浜松市浜北区）などの低地帯から、南アルプスのトウヒ林などの亜高山帯まで広く分布する。

### 3. 生息環境

アカマツ（マツ属）やトウヒ（トウヒ属）は、枝が輪生（同じ高さから四方八方に伸びる）し、横方向に伸びる。本種にとって巣を設けやすく、隣り合う木の枝を伝って樹上の移動もしやすい。さらに、球果は食物となる。他の樹種での営巣や種子などの採食も行われるが、県立森林公園では、アカマツを好んで利用する行動が観察された。

### 4. 生息状況

2003 年以前、2004 年以降ともに県内の低地帯から亜高山帯で生息が確認されている。

### 5. 減少の主要因と脅威

かつては広く存在したマツ林がマツ材線虫病により減少した影響が大きい。マツ科の樹木が多い森林の減少は、本種にとって生息環境の悪化と考えられる（54）。伊豆半島東海岸では、本種より大型のクリハラリスが野生化し、競合も危惧される（56-1）。浜松市で野生化しているクリハラリスの分布拡大は本種の生息に影響するおそれがある。

### 6. 保護対策

1994 年以降狩猟鳥獣から除外されている。県立森林公園など一部のマツ林は薬剤散布などにより保全を図っている。

### 7. 特記事項

伊豆市や浜松市天竜区などでは、本種がシイタケ栽培用のほだ木をかじり剥いてしまう被害が発生する。

### 8. 主な文献

鳥居春己（1989）静岡県の哺乳類。第一法規出版，東京，231 pp.

大場孝裕（2005）ニホンリス。静岡県自然環境調査委員会哺乳類部会 編，静岡県の哺乳類【資料編】，pp.69-71. 同会，静岡。

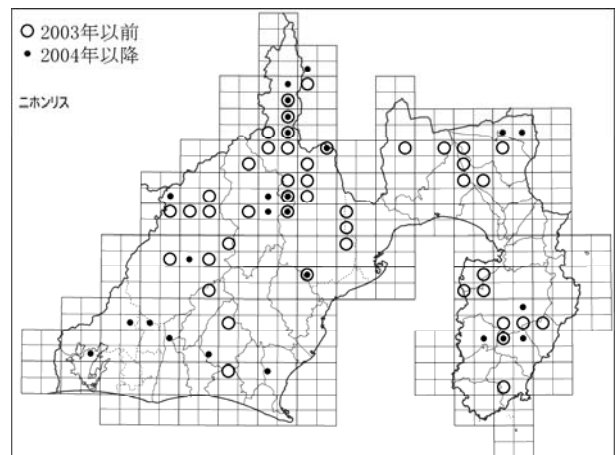
鈴木 圭・鳥居春己（2016）静岡県浜松市における *Callosciurus* 属外来リスの分布拡大。哺乳類科学，56(2)：199-205

### 9. 標本

静岡県産：ふじのくに地球環境史ミュージアム



富士市大淵 2007年7月20日 小泉金次



(大場孝裕)